

俳句雑誌

令和二年一月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十三巻第一号

水明

2020 1月号





新年おめでとう

ございます

本年もどうぞよろしく

水明創刊九〇周年の年

会員の皆様には

ご支援ご協力を

お願いいたします

令和二年元旦

主 宰 山本鬼之介

— 華の一句 —

小春日や薄く紅足す薬指

山中順子

立冬を過ぎても厳しい寒さは訪れず、春とはちがう澄みきった大気の中で、心地好い時が過ぎてゆく。紅花の色素から作られた貝殻入りの京紅。薬指に少しとり唇にはこぼ。ほっそりとした紅差指に黄昏時が近づく。
(鬼之介推薦)

このページには、昨年の十二月号まで「歴代主宰の一句」を載せていましたが、本号より「華の一句」というタイトルで、当月の全会員の作品の中から、主宰が珠玉の一句を推薦して掲載することになりましたのでご期待下さい。
編集部

水明

令和 2 年
1 月 号

華の一句

明けゆく杜 (作品)

山本鬼之介

4 1

秋から冬へ (近詠)

石井 喜恵

6

洛陽拾遺 (近詠)

五明 昇

7

水明俳句の目指すもの

山本鬼之介

8

切れということ

網野 月を

10

季音「雪」 (同人作品)

由良ゆら女
網野 月を

吉住 光弥
ほか

14

季音「月」 (同人作品)

小倉 倭子
井上 燈女

十倉 和子
ほか

21

季音「花」 (同人作品)

森川 義子
原田 想子

山田美佐尾
ほか

26

鼓笛集 (同人作品)・私の一句

56

雪嶺讃歌 雪欄作家近詠鑑賞

五明 昇

30

現代俳句鑑賞

網野 月を

32

硯箱 季音月評

井口 俊晴

34



水明集

大塚 茂子
 染谷 正信
 保坂 翔太
 ほか

水明集作品評

山本鬼之介

50

水 琴 窟（水明集十一月号鑑賞）

池田 雅夫

54

俳誌望見

梅澤 佐江

36

句集喝采

井口 俊晴

59

水明の記事掲載他誌転載

68

水明例会報・各地句会報

60

63

新春俳句大会・水明忌のお知らせ

69

九十周年のご案内

70

新珠賞作品募集

72

風声・発展基金御礼・水明掲示板

73

74

水明の運営組織

75

令和二年度行事予定

76

水明の句会・教室案内

77

後記

80

題字：長谷川かな女 表紙：内田恵子 カット：福田千春

明けゆく杜

山本 鬼之介

荒^{くわう}神^{じん}の杜も覚めたか初明り

大山が小山にしたがへ初御空

馬上軍扇直実公に淑気充つ

初風をうけ丸刈りのさるすべり
神の名を読めぬ者共はつまうで
初富士を借景にして麴蔵
男衆をとこの締むる春着の帯の音
晩鐘に彼の日の未練松をさめ

秋から冬へ

石井喜恵

後れ毛のピアスに絡む秋の暮
吾亦紅の未熟な紅のひとつ揺れ
落葉松や霧のテラスでハーブテイ
手懐けてみたき鴨ゐる雲場池
水澄むや入水のごとき池の樹々
木の葉散る小さく掛けて茶屋の椅子
初時雨土産に重きジャムの瓶

降り立った避暑地の駅は、夏の喧騒が嘘のように人影も疎ら、静けさが心地良かった。

高原の林道をゆっくり行くと、サイクリングの若者が風のように脇を通り過ぎて行く。早くも門を閉ざした別荘の庭には、吾亦紅がぼつんと揺れていた。

翌朝、散策に向かった雲場池は濃い霧に包まれていたが、水面には数羽の鴨と軽兎の子を見ることができた。水底まで根を張った大樹は、すでに冬の気配を纏っていた。

洛陽拾遺

五明昇

京洛の秋暑を凌ぐ茶漬飯
極まれば美は乱調にこぼれ萩
新松子読経を洩らす花頭窓
「一澤帆布」背中に軽き小六月
九条葱に都が薫る玉子焼
初しぐれ濡らすに惜しき蛇の目傘
冬ざれや町家に遺る刀疵

昨年七月、京都祇園祭を宵々山から宵山、山鉦巡行まで通して見学する機会に恵まれた。月鉦への搭乗や京舞鑑賞、貴船・川床料理のほか、祇園祭発祥の神泉苑、パワースポットの鞍馬寺、貴船神社の参拝まで組み込まれた贅沢なツアーで、久しぶりに京の魅力を満喫した。

その昔「京都検定」に挑戦、二級までを満点で通過し、勇躍一級に挑んだものの、三点差で苦杯を飲んだ口惜しさが忘れられない。歴史や社寺、祭、工芸などはともかく、言葉や習わし、伝説、花街まで含む京都の全貌は他所者には到底歯が立たない。それ以来、京都通ならぬ京都ファン^①の京都通いが始まった。

水明俳句の目指すもの

(第三回水明塾資料)

山本鬼之介

はじめに

水明俳句会は、令和二年九月に俳誌「水明」の創刊九〇周年を迎えるが、その輝かしい年に先立ち、第五代の主宰として、「水明俳句」の今後の目標を明確にしておきたいと思う。

水明俳句のモットー

これまでの経緯

初代・長谷川かな女、二代・長谷川秋子両主宰までは、水明のモットーと云うべきものは何ら示されていなかったが、三代・星野紗一主宰が、任期の途中から、「俳句は触感の詩である。皮膚感覚で風土性豊かな句を詠む。」と云ういわゆる「触感俳句」を提唱し、以来四代・星野光二主宰まで、俳句総合誌の広告や現代俳句（現代俳句協会の会報誌）年鑑の広報欄などに掲載されてきた。この「触感俳句」については、私が、平成二十八年八月、さいたま文学館に於て、「触感俳

句の検証」と題する講演を行ったが、この内容を水明のモットーにすることについて、以前から疑問を持っていた。それは、左記に示す二つの理由による。

① 触感には個人差があり、「触感で俳句を作る」と云う言葉自体が難解なので、これを水明俳句全体のものとして捉えるには無理がある。

② 「風土性豊かな句を詠む」と云っても、会の所在地と殆どの会員の居る場所が都会地であるから、この言葉に馴染が薄い。

これから

私は、創刊九〇周年を機に、水明を初代・長谷川かな女の原点に戻して再出発することを望んでいる。従って、モットーを設けるとしても、長谷川かな女の精神（かな女を含め会員それぞれの個性を活かした俳句作り）に沿ったものにしたいの思いから、左記の内容を立案して運営幹事諸氏の賛意を得た。

水明俳句のモットー

「俳句は感性の詩であるから各自が自己の個性を活かした俳句を詠む」

水明俳句における約束事と留意点

約束事

従来通り、「有季・定形・歴史的(旧) 仮名遣い」文語体」で作句することを基本とするが、俳句の内容によっては、例外的に口語体俳句も可とする。但し、一句の中に、文語体と口語体(旧仮名遣いと新仮名遣い)が混在することは不可。

留意点

- ① 季語は現在の中に存在しなければならぬ。「絵に描いた餅」は駄目。
- ② 俳句の題材に、過去の出来事や想い出を採用することは大いに結構であるが、季語が過去に埋没しては駄目。
- ③ 俳句は韻文であるから、韻を踏む「五・七・五」又は「七・七・五」で詠むのが理想。偶数字は韻を踏まず、リズムを壊すので、よほどのことが無い限り避けることが賢明である。「俳句」リズム「韻」を頭に叩き込むこと。最悪は「中八」なので、中八にならぬよう推敲を心掛けること。
- ④ 俳句は、文字数が極端に制限されるので、助詞を正しく的確に用いて、句意が正確に伝わるよう努力すること。
- ⑤ 助詞と同様、文語文法を修得し、句意を間違いなく伝える

よう努力すること。

- ⑥ 本来読めない漢字に強引にルビを振って読ませるような姑息な手法は駄目。このような俳句は選外とする。
- ⑦ 片仮名の乱用は駄目。必要最小限に留めること。
- ⑧ どう工夫しても季重ねが避けられない場合は、主たる季語がどれであるか分かるように表現方法を工夫すること。
- ⑨ 各々の季語の傍題(主題の下に列記してある)を活用して、俳句表現の幅を広げる。

個性を活かした俳句を作るには

- ① 自分が懂れる俳人の俳句そのものを真似してもそのとおり上手くゆくものではない。
- ② 懂れる俳人が居れば、その人の俳句を沢山鑑賞して作風を吸収し、そこに自分の個性を注入すれば、オリジナル俳句を生み出す可能性がある。
- ③ 背伸びをせず、自分の心と言葉で俳句を作る(書く)ことが大切で、これが個性のある俳句を生む源である。
- ④ 語彙を増やすことが俳句の上達に直結する。
- ⑤ 語彙の豊富な時代小説作家の本を読むと効果がある。藤沢周平とか、池波正太郎・佐伯泰英など。

「切れとリズム」

水明塾雑記

網野 月を

俳句において「切れということ」は季語の問題と並んで二つの重大事であろうと思います。有季定型とはよく言ったものです。その定型、五・七・五のリズムに於いて「切れ」の問題が最重要課題になっているのです。今回の水明塾ではその俳句における「切れ」とは何か？を考えます。「切れること」での目的は何か、つまり効果はどうかということも並行して考えなければなりません。また「切れ」を作るにはどうしたらよいか、という技巧的な側面も考えなければなりません。

「切れ」とは、簡単に言うて散文での句読点にあたります。俳句の十七音のどこかに句読点があることと解すればよいでしょう。もともと連歌、もしくは俳諧の連歌の場合、第一行目である発句（五七五）と第二行目である付句（七七）は別の作者が作るわけですから、句読点を付して区切ることが必要になります。ト書きをつけてもいいかも知れませんが、俳諧の連歌の場合は「間」を置くことでその場（座）の出席者は理解したのです。つまり連歌の世界では、発句の五七五

のおわりに句点がくる効果を「切れ」ることで明示したのです。

ここで少しばかり用語の整理をしてみましょう。「切れ」という言葉を私たちは容易に使いつつありますが、実は「切れる（切るる）」「切る」と「切れ」もしくは「句切れ」は少々ニュアンスが異なります。連歌の世界では「切れ」とは言いません。「切れる（切るる）」もしくは「切る」です。動詞的に使用して名詞的には使用しません。俳句の世界では、「切れ」という用語が一般的でしょうか。「句切れ」という十七音の終りに「切れ」ることを指すことが多いでしょう。「切れ」とだけ使用した場合には、十七音中のどこかで「切れ」が生じた時に使用することが多いでしょう。

実は和歌から連歌、連歌から俳諧の連歌、俳諧の連歌から俳諧（発句）、そして俳句と時代を追って行くと「切れ」ることのなんたるかがよく解る場合があるように思います。もちろん季語の働きについても同様です。

次に「切れ」を作るにはどの様にしたら良いのでしょうか？技術的側面を考えてみましょう。「切れ」を作るには幾つかの方法があります。次に列挙する五つが主なものです。①「切れ字」を使用する方法、②「体言止め（名詞止め）」を使用する方法、③「て」「して」を使用する方法、④「連用形止め」をする方法、そして⑤「命令形止め」をする方法です。その他にもありますが、一般的な方法は以上の五つです。

「切れ字」を使用する方法ですが、水明塾では連歌師とし

て名高い救済（二二八二〜一三七八）の表した『連歌手爾業口伝』の中から十八の切れ字を資料として呈示しました。助詞として「かな」「もがな」「ぞ」「か」「よ」「や」、助動詞として「けり」「ん」「つ」「ぬ」「ず」「じ」、形容詞の終止形としての「し」、動詞の命令形としての「せ」「れ」「へ」「け」、疑問語としての「に（いかに）」です。以下に例句を挙げてみましょう。

- 「かな」 さまざまの事もひ出す桜かな
子の日しに都へ行ん友もがな
「もがな」 秋深き隣は何をする人ぞ
「ぞ」 二人見し雪は今年も降けるか
「か」 稲妻にさとらぬ人の貴さよ
「よ」 閑さや岩にしみ入蟬の声
「や」 かれ朶に烏のとまりけり秋の暮
「けり」 西行の庵もあらん花の庭
「ん」 観音のいらかみやりつ花の雲
「つ」 子ども等よ昼顔咲キぬ瓜むかん
「ぬ」 風かほる羽織は襟もつくろわず
「ず」 其まよ月もたのまじ伊吹山
「じ」 やまざとはまんざい遅し梅花
「し」 比良みかみ雪指シわたせ鷲の橋
「せ」 打よりて花入探れんめつばき
「れ」 水むけて跡とひたまへ道明寺
「へ」 はやくさけ九日も近し菊の花
「け」

「に」 猿を聞人捨子に秋の風いかに

以上です。名句が揃っていますので、鑑賞してみてください。
次に「体言止め（名詞止め）」を使用する方法です。一般的には五・七・五の各箇所終りに体言（名詞）を配置する方法です。（句跨り）「句切れ」の場合はその箇所に配置することになります。この方法の場合はその後の助詞、「は」「に」「を」「の」などが省略されている場合もあります。作句の際も鑑賞の際もその点には気を付けないといけません。

三つ目は「て」「して」を使用する方法です。現代俳句に於いては流行らない方法です。多少時代遅れ感があります。また十七音の終りに付けた場合、注意して使用するようになりたい方法です。句の意味が確定しないことが多いからです。また中七の終りに付ける場合も要注意です。句の意味が説明的になってしまうことが多いからです。中七で「……て」を使用すると上手く座五を導き易くなりますから、使い勝手はよいのですが、反面どのような座五にでも導けることになり、句の意味が確定しません。中七の「……て」は九十五パーセントはダメな「て」です。

四つ目は、「連用形止め」を使用する方法です。これは現代俳句では好まれて使用されています。特に句中で使用すると効果抜群です。但し続く語が用言では「切れ」は生まれませんので注意してください。

最後に「命令形止め」をする方法です。古典的な名句にはよく使用されてきた歴史があります。願望や希望の句意を持

たせる場合には効果があるようです。

文頭に「切れ」はなぜ必要なのかを連歌の歴史から句読点の意味を持つと説明しました。つまり連歌においては発句が脇句、付句と「切れる」ためでありました。現代の俳句では伝えようとする意味内容がより拡がり、様々な事柄を句のテーマとするようになりました。それに伴って表現の方法もより深化してきたのです。そこで「切れ」の効果について句の意味内容の構成を立体的にするため、としてみたいと思います。次に掲げる三句はいずれも芭蕉の名句です。

古池や／蛙飛びこむ水のおと

比良みかみ雪指シわたせ／鷺の橋

辛崎の松は花より朧にて／

／のところに切れが生じています。(以後／は同様) 前掲句は上五で「……や」を用いて切っています。中七座五が聴覚的把握ですから、上五は頭の中の位置の確認です。古池を見ているわけではありません。「ああきつとあの古池にとびこんだ音なのだなあ」ということです。場所の提示ですが「古池に」では見ていることになりました。見ていれば座五は「水輪かな」くらいになる訳ですね? 「……や」で切ることによって座五の「水の音」が紡ぎ出されるわけです。

中掲句は中七の命令形「……せ」で切れを作っています。

座五の「鷺」へ願意を伝えていることになりました。願望の内容と、願いを託す相手を「……せ」の切れで分けて表現しています。

後掲句は十七音の終りで切れを作り出しています。「……て」の用例です。普通「……て」はその後に何かが続くわけです。しかしながら続くものが無い分、切れが生まれる訳です。「て」による「切れ」は、明確な切れによって、主語の転換があったり、感情の方向性がコントロールされたりする「切れ」ではなくて、そこに余韻が出来るということです。ですから多少不安定な、感傷的な意味合いが深まります。ここまで来てお分かりになるように「切れ」の効用には様々なケースがある訳です。

次に切れ字として代表的な「や」「かな」「けり」の三つについてその効用を比べてみましょう。

菊の香や／奈良には古き仏達

芭蕉の句です。これは一般的に呈示の「や」といわれます。五感に訴える条件を呈示しています。この句の場合は嗅覚的な内容を呈示しているわけです。

花さくや／目を縫れたる鳥の鳴

一茶の句です。この「や」は配合です。上五の季語「花さく」と中七座五の愛(かな)しい現実を取り合わせています。

山吹や／笠にさすべき枝の形

芭蕉の句です。この「や」は間を置くためのものです。多少の詠嘆も含んでいます。韻文の言語は生きていますので、「や」一つをとっても呈示の「や」、配合の「や」、間を作る「や」、詠嘆の「や」など多種あって、しかもそれらの効用がミックスされていることもあります。

灌仏の日に生れあふ鹿の子かな／

戦争と疊の上の団扇かな／

前句は芭蕉の、後句は三橋敏雄の作です。「かな」の歴史は古く奈良朝の「かも」に代わって平安朝頃から使用例があります。十七音の終りにだけでなく句中にも使用する例があって、便利な切れ字です。それだけに安易に使用されてもいます。足りない音を埋めるためではなく、必要な言葉を削ぎ落しても「かな」を入れたいくらいの覚悟があつて使用したものです。

くろがねの秋の風鈴鳴りにけり／

杳咲くとき／白山の消えゆけり／

霜柱／俳句は切れ字響きけり／

前句は蛇笏作、中句は八束作、後句は波郷作です。蛇笏句はいわゆる「一物仕立て」になっています。八束句は「二句一章＋一物」の型です。波郷句は「二物衝撃（取合せ）」の例です。「……けり」は句末に置くだけでなく「や」「かな」と同様に句中に置くことも出来ます。「詠嘆」「伝聞」「回想」「気づき」などの意味を含んで使用されることが多いです。「けり」を句中に置いた作例を見てみましょう。

垣越えて力抜きけり／黒揚羽

この小路月となりけり／鳥絵松

前句は日原傳作、後句はかな女作です。中七の「けり」の後に切れがあります。前句は切れを超えて「一物仕立て」になっています。かな女句は「けり」の切れ字で前後に区切ら

れていて、「二物衝撃（取合せ）」の内容になっています。

これら「や」「かな」「けり」は便利な切れ字ではあるのですが、現代俳句においては多少古めかしさを生じさせるため、極力使用しないことにしている作家も多いようです。

以後「水明誌」上の実作から用例をひいてみましょう。

百合の首くるつと回りピカソの目

中七の「……り」が連用形で「切れ」を作り出しています。

現代俳句のもっとも典型的な「切れ」の作例です。

日盛や風の天守に人の列

上五「……や」の切れ字を使用した「切れ」です。伝統的、

且つ不動の「切れ」かたです。

朝の靄寺領の山に百合句ふ

上五の「名詞」止めによる「切れ」の作例です。内容と統

く中七、座五の内容と合っていて効果抜群です。

百合の香に折檻されしひと日かな

連歌の作法では、「ひと日かな」から倒置して、上五中七

の意味へ繋いで読むこともあり、掲句も同様に読めます。現

代俳句では中七の「……し」を軽い「切れ」と捉えて、座五

の「かな」をより深い詠嘆と解釈することもあります。

当日は他に夏季競詠欄から三十三句を取り上げて実作の添

削も試みたが、小欄では省略します。不悉。

水明塾（令和元年十月二十八日）の講座内容を当日出席出来なかつた会員の皆様に再録しました。

季
音
雪



黄昏時 由良 ゆら女

掌にたしかめてより時雨傘
浮舟の墓にまうでて白粉ばば
眼前に綿虫青き大目玉
払ふ手に粘る一期の雪ぼたる
夕暮れは水のにほひの一葉忌

万歳 吉住 光弥

天地の厄快癒を祈る文化の日
合掌のほどく掌すぐに秋の冷
棍棒で我を打つてみる秋の冷
「万歳」聞く故事あり悲し返り花
しぐるるや不要いらぬと思ふ暦れき買ひに

好もしい 網野月を

大根抜く来てはくれないラガーマン
団栗のその丸腰が好もしい
口の周りが三波伸介秋刀魚焦げ
入れ替り姉妹を肩に酉の市
冬めくや剃刀負けの顎を撫す

風あるやうに 石井喜恵

石庭の白砂の奥より秋の声
鴟の贅風あるやうに揺れにけり
そぞろ寒かちりと外すドアチェーン
やや寒の下駄箱にあるハイヒール
ロボットの膝の屈伸文化の日

晩秋 石山かつ子

防犯カメラ作動中なり帰り花
木の実ころころ着地の場所を探しをる
晩秋の報徳神社より花嫁
夜叉となり仏となりて大焚火
病窓の空ばかり見て神の留守

しろばんば 大橋廸代

跳びよぎる冬鹿二頭九十九折
百僧の梵唄に湧くしろばんば
空海の綿虫包む諸手かな
雑僧の下駄ひびかせて今朝の冬
綿虫や踏まれ目を剥く天邪気

人さらひ 大村節代

ご神体の真偽さておき新酒上ぐ
神の留守ゆるりと入る辻やしる
霊木の柵に鳩居る神の留守
神の留守心得顔に鳩遊ぶ
神の留守鎮守の森に人さらひ

渴水期 栢尾 さく子

冬芽びつしり何も願はぬ手を合はす
雉子鳩の土けちらかす渴水期
山眠る濡れ石で消す葺の火
裏山の冷たき匂ひ鏡掛
毛糸編みふくらんでくる遠い川

潮の香 菊池 ひろこ

潮の香の入りこむ朝の布団部屋
今日の歩数知らねど軽き掛布団
転勤の地にも獣に似た枯木
大志いまだ青い炎の黄落期
記名あるものより湿り黄落期

冬来たる 小林 萬二郎

うす闇の光悦寺垣時雨けり
開運の願ひはひとつ酉の市
枯蟪螂やがては朽ちる草のさま
冬ざる彫りの寂びたる道祖神
海神となりし学徒や冬ざるる

萩騒ぐ 五明 昇

健やかに生きて令和の今年米
縄電車乗車記念のみのこづち
天に富士潮騒を聴く新松子
野にひそむ叛徒の影か萩騒ぐ
あれこれと軒端に柚の冬支度

備忘録 境 延 昭

レモンを齧り二十の記憶呼び覚ます
冷やかや離宮の庭に石の椅子
晩秋のダークスーツや丸の内
冬支度行方わからぬ備忘録
いもがらの日向臭さよふるさとよ

秋から冬へ 椎野 美代子

帰り花一輪なれど後髪
インターホン美男葛の実の揺るる
さねかづら夕日爛熟して墮つる
化けさうな舞茸葉缶鳴つてゐる
冬堇オーデコロンを一と垂らし

秋 晴 れ 島 津 初 花

秋晴れや即位祝儀のオープンカー
曼珠沙華狼煙のごとく炎え盛る
葱一畝終の土寄せ念入りに
桜紅葉陰を追ひつつ舞下りる
冬めきて土産の包み美しき

夜半の秋 鈴木康世

露寒や紅差し指の疼き倦む
露寒し遊女の墓碑の文字薄れ
枕辺に「一分音読」木の実雨
異体字の読めず辞書繰る夜半の秋
終章に思ひの至る夜半の秋

点字の 永野史代

寄附金に点字のお礼今朝の秋
英雄の話にコニヤック秋の夜
開智学校蝗まぎれてゐたりけり
朝鳴キイーと鳴きてはじまる偏頭痛
雨けぶる兄命日の白桔梗

たとふれば 西山貴美子

脇語りの三味朗々と暮早し
山茶花垣然らぬ体してすれ違ふ
冬薔薇の棘隠しても隠しても
冬の薔薇今ひとたびの恋をして
たとふれば藪柑子程の恋なりき

かみなづき 波多野寿子

平和をと説く天皇やかみなづき
お車にかがやくティアラ冬薔薇
紅葉散る山ふところに紺のれん
峰に雪蕎麦屋にはのと昼灯し
冬日差すそば屋の水車ねずみ色

寒 牡 丹 服 部 みどり

旅 日 記 茂 木 和 子

肩くんで足のさみしい曼珠沙華
露寒や小犬三匹曳く女
連れ帰りたい焼表裏なき焦げ目
露寒や息子とのハグ暖かし
凜としてうしろは見せぬ寒牡丹

右も左も紅葉盛りのバスの旅
うすうすと山霧晴るる和合神
肌寒やダイヤダストに白樺湖
城下町通りを外れ七竈
外壕のおだやかにして白鳥来

風 の 行 方 星 野 和 葉

烏 瓜 森 千 代 子

蕎麦搔を所望し専らスマホ繰る
蕎麦搔や酒一本と指を出し
赤と黄の手袋つなく仲よし小よし
心揺る形見の手套つけし時
天窗より風の行方を冬隣

藪陰にそつと色づく烏瓜
園児の列不意に乱れる烏瓜
烏瓜 銀杏大樹の首飾り
遠目には柿の赤さの烏瓜
烏瓜霜の帽子が似合ふげな

和紙の里 矢作水尾

どんぐり 山中みどり

晩秋や水音の透く和紙の里
大根の髻たぶきつかみて力瘤
深きより地軸の軋み返り花
羽のごと袂を広げ七五三
おたふくの年増集ひて二の酉へ

団栗やとろりと微温き鉱泉湯
団栗や溪に沿ひゆくけもの道
霧深き湯宿ひねもす灯しけり
スマホ置き団栗拾ひに行かないか
団栗や人工関節てふ同伴者

冬夕焼 山中順子

(順送り)

小春日や薄く紅足す薬指
今年また母の忌に咲く帰り花
内戦国のこどもの涙返り花
耳通りよき晩秋の葉擦れかな
はたらいて冬夕焼に包まるる

☆

☆

季音月

心象 小倉倭子

皇后の感涙掬ふ秋の天
 街路樹の葉擦れ間近に色なき風
 自画像に心象あらは末の秋
 病む心がぶつと林檎丸かじり
 根津坂の古書市巡る小六月

綿虫 十倉和子

救世観音の指に消ゆるや雪ぼたる
 綿虫やぎつくり厚き椀皮葺
 綿虫のかがよふ城址登りきる
 綿虫を払ふ取的まだ少年
 綿虫をしたがへ騎馬像ひた走る

短日 井上燈女

青淵の論語に触るる秋燈下
 葱の香や風に吹かるる栄一像
 鋤焼や兄弟姉妹皆息災に
 遠来の客腰上げる日短か
 納屋の戸を閉め短日の作業帽

片時雨 丸山マスマ

店先に緋緘鎧文化の日
 戸を閉つる音の乾きや冬近し
 木の葉脱ぎ風格確と老大樹
 山霊と遊ぶ高音か冬の鳥
 片時雨山の端にある夕茜

ブルーシート 森田祥絵

一瞬に水のつながる秋出水
 ブルーシートに月の祈りの台風禍
 木枯やかたまつて行くランドセル
 小春空鳴らぬ口笛吹いてみる
 雪吊の裾たつぷりと土に添ふ

山茶花 高島寛治

天領の腹の大きな下り鮎
夕暮れて秋の簾に人の影
冷やかや風車は空を攪拌す
木の葉降る山城守る濠の跡
山茶花や尼寺五山訪ふ旅路

のこぎり屋根 松本光子

時雨をりまだあたたかき茹で卵
冬の雷のこぎり屋根を転げ落つ
時雨傘とんと水切り猫の声
三毛猫の詩宿の障子に穴一つ
冬晴の起重機くるりと向きをかへ

皇后の涙 柚木治子

伝授する昔の遊び文化の日
御紋章のモデルどれかと菊花展
皇后の涙がきらり小春空
花柎肩にこぼるる高貴な香
冬ざるる更地にぼつり屋敷神

冬の月 藤澤喜久

幻の琉球映す冬の月
神無月首里城虚し空残す
冬の空過去捨て切れぬ影法師
冬の雷消したテレビに映る顔
追伸の離婚の文字や楯明り

冬薔薇 田寺玲子

雪ばんば廓跡てふ朱の手摺
教会の庭にアンネの冬薔薇
挨拶の声はづみあふ小六月
出航の汽笛こだます小春風
切れさうな太刀魚糶られ昼日燦

指切り 森本早苗

露の世のかの指切りは幻に
温め酒約束二つ預け置く
冬めくや霊峰富士の薄化粧
綿虫や恋のバトルの書院裏
親友の訃報届きぬ小夜時雨

血脈 伊藤敦子

耳孔にも血脈ありて花八ッ手
小春日の縁に肉球いとしめり
キリストの鎖骨の凹み秋桜
枯蓮や水に平伏してゐたり
葬りは種種あり大綿むらさきに

柚子 宇田白鷺

柚子味噌を作る母あり有難し
柚子の香や天の橋立さかさまに
水仙や上皇后さま薫りたつ
手ばなさぬ手帳が宝古日記
三丁町ベンガラ格子暮早し

凜凜し 鳥羽和風

立冬や羽織る一枚母の物
赤蕪のいよいよ赤き酢漬かな
茶柱のねたりおきたり掘炬燵
御神木御幣凜凜しき年用意
寒菊の葉は減びつつ黄は盛り

たばぬる 渡辺舍人

南瓜ゆ声あり男は黙つて勝負せよ
勝ち馬のなほも秋日へ疾駆せる
後ろ手に十一月の妊婦往く
あぶな絵に裸電球文化の日
群といふ束ぬるちから冬の鯉

淡水パール 町野広子

汁の実に豆腐油揚げやや寒し
あつけらかんと憎めぬ女鴿日和
手で困ふ蝗に脚で蹴られたり
不揃ひの淡水パール小鳥来る
平板な日々木犀の咲いて散る

息白し 池田雅夫

短日を雨の仕業と言ふ農夫
倒木の芯まで濡るる冬の雨
雨ついに白くなりくる寒さかな
息白し気魄みなぎる名勝負
熱爛や騙され易き好好爺

秋 思

霜中冬至

よるべなき闇をまとひて大冬木
自分史にとどめて置こう柿落葉
一族の合同法要石露の花
もの言はぬ能面に逢ふ秋思かな
木枯しや似た者同志吹きだまり

帰り花

荒井 俱子

みのこづち付けて少年凱旋す
草の実や小石積まれし野の仏
冬支度予防接種に始まれり
帰り花ころり逝きたいなんて嘘
白障子横座の兄と酌む地酒

木の実

内田 恵子

時計台針のかたと木の実散る
城壁に囲まれし街木の実舞ふ
親切の中途半端に仏手柑
参道の天空隠す大熊手
酉の市フランスパンを抱へゆく

小春風

川野 妙子

赤子抱く若き父の目小春かな
赤ん坊飽かず眺むる小六月
小春日や京の土産のどさりくる
小春風話のつきぬ主婦四人
冬夕焼窓を焦がして消えにけり

冬うらら

井関 礼子

降り立てば白砂青松冬うらら
釣人の待つでもなくて冬の風
冬紅葉陽のおだやかに園の賑
羚羊の缶転がすも所在なく
柎の咲き初む狭庭半生を

冬日和

加藤 むら子

笠山の特に際立つ冬日和
札所への山茶花の道姿勢よく
紅葉山白雲流る日和かな
北風に押され押されて帰り道
一言づつ意見述べ合ひ蕪汁

露寒 岡野 順子

露寒や残されてゐる庭下駄よ
露寒の更地は更地手がつかず
栗の毬割れてこの世の渾沌と
栗をむくちからを入れて少し抜く
襖閉める静かに静かにの一語です

紅葉 川崎 道子

小鳥来る口笛やつとメロデーに
櫛紅葉消火器期限確かめる
夕紅葉はや閉門の鐘が鳴る
歪んで見ゆる大正ガラス冬紅葉
綿虫や早々たたむ鯨幕

☆ ☆

特集 新春！ 師弟競詠

特別企画 二〇二〇年元旦・私の年賀状

新春巻頭作品7句

鷹羽狩行・稲畑汀子・深見けん二
有馬朗人・中原道夫・高柳克弘
恩田侑布子・黛 まどか・小林貴子
日下野由季

俳壇 1月号
12月14日発売
定価900円(税込)
巻頭エッセイ
嵐山光三郎

八木健造 滑稽俳壇

四季巡詠33句……宮坂静生・柴田佐知子

新連載 わが俳句道・わが金言(モットー)……辻 桃子
先人のことば……松尾隆信
超結社句会へようこそ……棒の会

連載 続・日本の樹木十二選……広渡敬雄
俳壇史エピソード……坂口昌弘
季語への供物……奥坂まや

俳壇時評……坪内稔典／俳壇月評……長嶺千晶

俳句と随想12か月 野中亮介・武藤紀子

本阿弥書店

〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話 03(3294)7068 振替00100-5-164430

季音花

酉の市 森川義子

童顔の警官酉の市に立つ
 呼込みの訛滔々酉の市
 急坂にバスつんのめる紅葉狩
 実習は先づ大根の桂剥き
 鉄棒の着地はびたり天高し

冬ざくら 山田美佐尾

晩秋やダンスタンゴの風甘し
 風に揉まるる無花果の奇妙な甘さ
 巫女の掃く箒目確か神の留守
 結願の杖そつと置き冬ざくら
 掌の中に五百円玉酉の市

河内ダム 原田想子

河内ダム紅葉の散るは沈金よ
 龍神の燃やし給ふるダム紅葉
 山紅葉湖底に消えし村の供花
 他の道も歩いて見たし山の秋
 落すもの落とし孤高の大銀杏

冬めく 松宮保人

稲妻や遠山の峰あらはにす
 後ろ手の男刈田に立ち尽くす
 秋草を揺らして停まる無人駅
 日参や灯火は暗し冬めきぬ
 たをやかに茶席の匂ふ小六月

北風匂ふ 梅澤佐江

黄落の静寂極むる神の池
 銀座晩秋昔の味の餡蜜屋
 天地の深きしじまに初時雨
 物憂き乙女大根おろしのうすみどり
 抱きしめて北風匂ふ児の巻毛

木の葉雨 井上玲子

禅林の静寂をやぶる木の葉雨
蹠より冷ゆる本堂釈迦如来
吊橋の溪風頬に木の葉散る
張扇はつしはつしと秋闌くる
縁側に光のつぶて蒲団干す

文化の日 田中千穂

文化の日酒にほふかに「棒縛」
錦秋や北斎を見てモネをみて
着飾りて胞子養ふ毒きのこ
朝霧をまとふ城址の野面積み
科多く生き来て今や山眠る

山紅葉 大場順子

松にまで燃え移らむと山紅葉
冷やかや堰こす水のはがねめく
手を触れて炎冷やか火焰土器
小春日やちひろ絵本の色使ひ
御招ばれの帯の先まで小春縮む

冬の雨 松井由紀子

「本買います」のちらし取置く小六月
寒禽の一羽づつ来る小さき庭
夕しぐれ沼へひろぐる墨流し
夜の底をびしよ濡れにして冬の雨
冬の雨まこと家居の安らけし

冬初め 井口俊晴

黄落やジパングと化す峡の村
へそ曲がりそれとも律義帰り花
悪戯の証拠ありありるのこづち
童顔のいよいよ丸く冬帽子
木刀の風切る音や冬初め

冬紅葉 松山清子

霜月や古刹の裏に薪積まれ
美男葛熟れて碑華やげり
人はみな元素に戻る冬紅葉
軽やかなマチスの素描冬ぬくし
白菜をばきつと切りてうれひ断つ

紅葉

宮崎雅訓

観楓のバス後続に朝日あり
茶菓を手に雑木紅葉を車窓から
貸切のバス紅葉山借りにけり
家族待つ子と先行く子紅葉道
紅葉かつ散るをゆるりと昼下り

霜便り

秋山冷子

オクタールブ高く鄙唄稲雀
穴に入る蛇優先に通学路
叱られし記憶ばかりが破れ蓮
石仏の剥落はげし霜便り
色鳥の一声添へて今朝の卓

柿の里

西浦千枝子

王朝の美へ歩みの遅し冬館
茅葺の一軒残る柿の里
キトラ古墳に真つ赤な新車花八つ手
散歩ねだる犬と目の合ふ小六月
葬列へつかずはなれず雪螢

冬うらら

野口和子

馬事公苑落葉あまねく降り注ぎ
冬麗や薄紙のごと昼の月
ワインめく味の日本酒酒造
好物は後で食べる派冬うらら
木を伐つて白菜畑陽の当たり

村時雨

上戸千津子

無心にて遊ぶ雀や一茶の忌
展示場薪を刀に菊侍
松籟と千鳥合唱舞子浜
だしぬけに行く手を阻む村時雨
冬霧に藁葺の家御殿めく

寒椿

中野彊

台風能耐へ直立の埴輪達
記念植樹名の色褪せし秋思かな
青空に祈ることあり寒椿
誕生日栗沢山のお赤飯
立冬よ似合ふかと聞くベレー帽

寒禽 野平 美紗子

水漬きし森に寒禽声絞る
余念なく鳩羽繕ふ小春かな
小春風シューツ真白に干し上る
小春日や母の遺品の琴の爪
柿紅葉大和へ帰る切符とす

暗がりに 矢鳥 清

切り通しこれより北風一丁目
林檎むく幸せ語る友の顔
暗がりに鍵穴さがす寒さかな
湯豆腐や味方にならぬ人と座す
たつぷりの水で冬菜を洗ひけり

黄落 菅原 知子

江戸文字の提灯並ぶ西の市
青き目も手締めそろへて西の市
椽の実や遺影の母の富士額
銀杏黄葉をハイネ詩集の栞とす
紅葉且つ散る炎と消えし首里城

潤滑油 福田 千春

黄落やだらだら坂を亀の歩で
黄落の木洩れ日纏ひベビーカー
立冬や閑節に欲し潤滑油
西の市値切り上手の手締めかな
担がる熊手のおかめ妻に似て

雪の富士 後藤 綾子

夕照の日矢はね返す雪の富士
小春風サックスひびく駅広場
ちやんちやんこ翻して乗る一輪車
見え見えの俄マジシャン小春風
薬草の乾く軒下冬隣

雪嶺讚歌

●季音雪欄作家近詠鑑賞

五明昇

◇岩槻城址公園（十月号）

残暑なほ乳鋌錆びし大手門

石山かつ子

岩槻城は戦国時代に築かれた平山城で、大宮台地岩槻支台上に立地し、武蔵国岩槻藩の藩庁だった所だ。大手口址には黒門と呼ばれる江戸期の大手の門構えが移築保存されている。残暑はまだ厳しく、門扉に打ち付けられた乳鋌の錆に城の来し方を偲ぶ作者の額にも汗が滲んでいる。

翡翠の水弾いては同じ枝

園内にある池には、この公園の象徴である、ギザギザの形をした朱塗りの八ッ橋が架かる。池の辺りに翡翠が来たらしくカメラを構えた人々に緊張が走る。翡翠は鮮やかな水色の体と長い嘴が特徴で、枝の上から水中に飛び込んで採餌し、再び枝に戻る早業はカメラ愛好家の格好の被写体だ。

藩校の屋根の燻蒸秋暑し

寛政年間に儒者尾玉南柯によって開校された岩槻藩校「遷喬館」に燻蒸の煙が立ち上っている。燻蒸は防菌・防虫効果で茅葺屋根の耐久性を高め、文化財を保全するための作業で、現在では囲炉裏の代わりに燻蒸機が使われている。

◇池之端より（十月号）

三四郎池緋鯉が亀にそつと寄る

境 延昭

三四郎池は東京都文京区の東京大学本郷キャンパスにある、夏目漱石の長編小説『三四郎』のモチーフになった池。江戸時代には加賀藩上屋敷だった所で、前田家の大名庭園「育徳園」の一部である。このあたりがキャンパスのほぼ中央。池の辺に佇む俳人の眼が亀に寄り添う緋鯉の姿をとらえている。

白粉花裏門からの石畳

作者が散策を始めた池之端門は、東大キャンパスの最東端に位置する門で、閑静な雰囲気にも包まれている。門を入れれば緩やかな石畳の上り道が構内へと続き、周辺に蔦の這う古い煉瓦造りの研究棟が散在する、作者のお気に入りの場所だ。

水澄んで江戸の名水「飲用不可」

池之端門の脇にある境稻荷神社の社名は忍ヶ丘と向ヶ岡の境であることに由来している。社殿北側にある弁慶鏡ヶ井戸は源義経一行が奥州へ向かう途中に弁慶が見つけ、一行が喉をうるおしたと伝え、江戸時代は名水とされていたが、今は「飲用不可」となっている。

◇秋まつり（十一月号）

山中みどり

鳳凰の稲穂が揺るる大神輿

牛島神社は貞観年間に慈覚大師が建立したと伝えられ、本所総鎮守として人々の崇敬を集めている。

毎年九月十五日の例祭のほか、五年に一度の例大祭には黒牛が曳く鳳輦が氏子町内を巡行する「神幸祭」が催行され、返礼に氏子各町の五十基もの神輿が集結する「連合神輿宮入」も圧巻である。祭に酔う下町の熱気が伝わってくるような一句だ。

撫で牛の尻あたたかし秋の宮

境内に鎮座する「撫で牛」には「自分の体の悪い部分を撫で、牛の同じところを撫でると病気が治る」との言い伝えが江戸時代から伝わる。撫で牛の功德は心の病や子供の成長にも及ぶとされ、現在に続くパワースポットだ。人々に撫でられてつるつるした牛の尻が、秋の陽に暖かい。

乾きたる千社札より秋の蝶

牛島神社の例祭が終わると、必ず雨が降り涼風が吹き渡つて、隅田川界隈の下町に秋の気配が色濃くなるのだと言う。社殿のあちこちには古くからの千社札が貼られているが、その乾いた一枚から今しも秋の蝶が舞い降りてきた。小ぶりで忙しないその姿にもしみじみとした哀感が漂う季節だ。

◇河内川ダム（十一月号）

島津 初花

ふる里に豊かな秋の水源地

福井と滋賀の県境をまたぐ駒ヶ岳を源に、福井県若狭町を経て北川へ合流する河内川、この流域の熊川地区に県営の多目的ダムが完成した。洪水調節や河川環境の維持を目的に農業用水や飲料水なども賄うものだが、ダム建設に伴い河内集落の三十五戸が移転し、着工から三十六年を要する大工事となった。故郷に完成した豊かな水源地を寿ぐ一句。

放水の飛沫の果てに秋の虹

河内川ダムは越前鯖街道で有名な熊川宿の南端の山道を登った所にある。高さ七七・五メートル、堤長二〇二・三メートル、貯水容量八〇〇万立法メートルの規模を誇り、ダム湖は「明神湖」と命名された。美しい景観を楽しむためダムを訪れる人も多からうが、運が良ければ放水の飛沫の先に幸先よく山峡を結ぶ虹の姿を見ることが出来る。

岩魚焼く匂ひも山の宿料理

ダムを目の前にした駒ヶ岳の中腹に、若狭の大自然に囲まれた河内トリウム温泉「リフレステやまびこ」がオープンし、近江・若狭の奥座敷として人気を集めている。筆者は掲句を同所での句と推測し、地元でとれた海の幸や山の幸に川の幸を加えた「食の醍醐味」に魅了されている。

現代俳句鑑賞

網野月を

扇風機回つてゐたる三和土かな

草深 昌子

〔俳壇〕十一月号・奥木の実より

ある年齢以上の方々には日本の原風景としての三和土の間が想像されることであろう。具体的にはそれぞれ異なる景かも知れないが、その場の光の加減や実体として脳裏にのみがえってくる。座五の切れ字「・・かな」が効いているし、それ以上に中七の「・・ゐたる」が過去からの体験としての原風景と今現在を結びつけている。他に「一家みな一つ間にゐる良夜かな」がある。

むらさきの深呼吸して地下鉄へ

佐孝 石画

〔俳壇〕十一月号・上京より

吸気が「むらさき」なのだ。作者の意図は分らないが、筆者はそう断定した。吸気は見えないのだが、自分の体に入り込んできた大気が一種の質感をもって体感できたのであろう。その一種の質感が「むらさき」で表現されている。昨今、地下鉄を素材にした句に出会うことが多いのだが、掲句のように地下鉄へ向かう前の心構えを書いたものは初めてである。他に「キオスクで切り傷のような空を買いました」がある。筆者には難解な句が多いのだが、現代俳句の旗手の一人である作者の句をどうにかして把握したいと考えている。

六林男忌や缶蹴りしより敵味方

出口 善子

〔俳句界〕十一月号・自選30句より

「缶蹴り」という遊びがあった。小学生時代にはよくやったものである。鬼と鬼でない子という役割があつて、鬼役はとつともなく詰まらない遊びなのである。というよりは切ないくらい疎外感のある遊びのように感じた。筆者の記憶にある。鬼と鬼でない子に擬えて、大人になつてからでも何かの切つ掛けで敵味方に分かれなければならないことが出来たりするものだ。

六林男という俳人は終生、ご縁に繋がる人たちを大切に過ごした方のように思う。例えば三鬼に対しては彼の死後も名誉復権の裁判を傍聴し続けたと聞いている。六林男と缶蹴り遊びの疎外感とは両極にあつて、そして対のように感じられる。

色残る枯菊の未だ焚かずあり

齋藤 朗笛

〔俳句界〕十一月号・頃日抄より

微細な情緒を描き出して秀抜である。「残る」「枯」「未だ」「ず」と四カ所のネガティブ表現を入れながらマイナーな感傷に終わらず、むしろ優しさを感じさせている。枯菊に僅かに残る色合いへの愛惜が横溢しているからであろう。

茄子の馬夜のカーテンふつと揺れ

浅川 芳直

〔俳句四季〕十一月号・夜のカーテンより

想いの溜まった句である。「ふつと」という措辞は俳句では有効に働かないことが多いのだが、巧く使っている。掲句のような家族や縁者の事柄を書いた句、つまりパーソナルな内容の句作りも、俳句の効用であろうと考えている。母も俳句とか孫俳句も大いに作った方が良いと思う。少なくともその母親の周囲の方々や成長した後の孫は、それらの句を読んだ機会に愛された母親や慈しまれた自分を感ずることであろう。いわば俳句に拠るタイムカプセルなのである。

掲句は対象の人物が固定されていない分、客観的な叙述になっけていて、パーソナルな句とは一線を画しているところがある。中七の「夜」を「よる」と読ませたところに突き放した感傷があるように思う。

宿の下駄いちども履かず鹿威し

関戸美智子

〔俳句四季〕十一月号・新秋より

ストーリーを作り出している。軽妙なタッチで諧謔性にも富んでいる。中七の「いちども履かず」の否定形は、「鹿威し」という聴覚での庭への関心の満足を表現しているのではない。庭を見ずに終わってしまったという心残りを表現しているのだ。僅かな措辞で表現する世界を拡張し、深化させるに巧みな作者なのである。

秋祭ある沿線やすこし飲む

阪西 敦子

〔俳句〕十一月号・沿線より

途中下車したのか？ 乗り越してみたのか？ 通勤電車の沿線に秋祭が催されていたのだ。中七の「・・・や」は感嘆というよりも大きな切れ、大きな間として筆者は読んだ。飲んだ所はその祭の場もしくは、祭りをやっている駅周辺くらいに思う。誰と飲んだのかも、何を飲んだのかも書いてない。「すこし」だけの修飾で作者が満足しているところに饒舌を嫌った作者の性向が見て取れる。兎に角も「沿線」で決まりの句である。

椰子の実の照りに蜻蛉の近づけず

高勢 祥子

〔俳句〕十一月号・地下通路より

科学としての事実と創作の世界の表現している内容は異なるのである。芸術の真実は科学の真実をすっぽりと包み含み尽くしている。「近づけず」は物理的な距離なのか？「照り」は明度なのか光度なのか？分らない。「実の照り」の質感と解釈できるかも知れないが、芸術の世界ではどちらでも良いことなのである。芸術表現の何たるかを教えてくれている。

鍵おとし籠る秋夕焼けの後の闇

松下 けん

〔第12回九州地区現代俳句大会応募作品集より〕

闇に鍵がかかっている想像は凄まじい。作者は篠原鳳作の系譜にある方だ。読み手の力量が問われているように感じた筆者は、主語を作者ご自身、そして空間の設定のみで表現している句であると解釈した。「闇」は意味世界も表現しているようだ。

硯箱

◆季音十一月

井口俊晴

金木犀記憶のずれる友と居て

山中みどり

散歩していると金木犀の香りがしてくる。思春期の甘く懐かしい思い出につながるから不思議だ。あの頃の友人がたまらなく懐かしくなる。しかし、記憶が曖昧になり、お互いどちらが本当だったのか、分からなくなること。 「あら嫌だ。わたし泣いたりしなかったわよ」「うそ、先輩と別れてすぐ落ち込んでいたじゃない」とか、いくつになっても、お互い話が尽きない。

初さんま大海原に研かれて

由良ゆら女

秋の味覚の代表のさんまだが、今シーズンの漁獲量は、半世紀ぶりの不漁と言われた一昨年の半分以下とか。しかも、高いうえに痩せて脂がのつていないと散々だ。それでも私はスーパーで買い物しては、厭かず食べている。作者も賞味さ

れたことだろう。夏の間、涼しいオホーツク海で成長したさんまは、秋になると東北や関東の沖に帰って来る。「秋刀魚」の名に恥じぬ美しい魚体は、大海原の荒波に研かれてこそのものだ。

点景の牛動かざる大花野

五明 昇

広い野原いっぱい咲き誇る秋の花。なんの花だろう。萩、コスモス、野菊、それとも女郎花だろうか。目路の限り、余計なものはない秋の野だ。はじめ遠くで見えなかったが、作者は一頭の牛が身じろぎもせず立っているのに気付く。印象派の絵画を見るような雄大な景色である。

新米や仏飯の山高く盛る

島津 初花

新米のシーズンである。なんと言っても瑞々しくて香りが違う。「令和の新米プレゼント」などと銘打ってセールが目

玉にもなる。とにかく日本人はご飯と味噌汁が大好きなのだ。お仏壇のご先祖様にも、今朝からは炊き立ての新米を、それも山盛りにして食べて頂こう。「新米や」と言った作者の張り切りようが伝わってくる。

星月夜耀変茶碗さながらに 柚木 治子

国宝の耀変天目茶碗を見たことがある。漆黒の肌に無数の星が輝いているように見えることから「小碗の中の大宇宙」と称される。「窯変」や「曜変」とも書く。都会ではきれいな星空を見ることが出来なくなつて久しいが、星の煌めく夜に出会つてみたいものだ。

タンカーの遅遅と残暑の沖をゆく 田寺 玲子

立秋が過ぎたというのに、油照りとても言うのか、今年は耐えがたい暑さが続く。阪神間に住む作者は、ある日、神戸沖を航行しているタンカーを目にする。遠い船の動きは止まつてもいるかのようにだ。額の汗をハンカチで拭いながら、沖ゆくタンカーに思いを馳せる。

秋雷の小言を食らふ二百分 森本 早苗

さぞかし怖かつたことだろう。三時間以上もゴロゴロピカピカやられたら、たまつたものではない。台風に集中豪雨、そして落雷。日本はもはや熱帯気候、異常気象の国となつてしまつた。「地球温暖化を招いたお前達に責任があるのだぞ」と雷様に叱られたのだ。

秋の海千尋の底に御紋章 山田美佐尾

太平洋戦争では多くの艦船が海の藻屑となつた。特にミッドウェーやソロモン沖の海戦では、日本海軍の軍艦が多数沈没した。一壽は一・五^ノノ^イだから、水深一五〇〇^ノノ^イの深海だ。発見された軍艦の艦首には、フジツボや海藻がびっしり張り付いた菊の御紋章が見える。鎮魂の句である。

秋湿よくぞ戻りし呆け猫 松井由紀子

秋雨が降つて、うすら寒い朝。どこをうろついていたのか、家出していた猫が帰つて来た。なんだか痩せて毛艶も悪くなつたようだ。

餌をガツガツ食べたところを見ると、苦勞もしたようだ。馬鹿な子ほど可愛いのは人も猫も同じだ。

俳誌望見

梅澤 佐江

〔遊牧〕 令和元年一〇月号 通卷一二三三号

代表 塩野谷仁 発行所 千葉県船橋市

平成一二年四月、塩野谷仁が船橋で創刊。師系金子兜太。「定型を基に現代の叙情を追求する」を理念とするが、兜太亡き後その精神の真髓の継承をめざす。(隔月刊)。

本誌のモットーは全員参加型の俳誌、その為全員が何かしらの企画に参加出来るよう配慮されている。

特別作品(一五句とミニエッセイ) 六名 各二句ずつ紹介

(一)「かなかな」 直江 裕子

時に死とたわむれる日も合歓の花
沙羅の花遠いか近いだけのこと

(二)「避暑名残」 松戸 圭

青みどろ生さるも罪科死ぬも咎
月明かり闇を融かして歎異抄

(三)「夜の秋」 佐々木幸子

シャガールの女空飛ぶ晩夏かな
灯台の灯の棒晩夏の闇めぐる

(四)「茅の輪」 相澤 泰子

少年のぬつと茅の輪の無限大
立秋のまえとあとの日原爆忌

(五)「鶏頭花」 林 ゆみ

大花野右手重たき日のありぬ

秋の蝶貝殻骨のあるやなし

(六)「座禪草」

熱帯夜鎖骨の黒子溶けかかる
雨螢ひとつひとつに重い闇

一句目、鋭い死生観。二句目、人間の心理の探求。三句目、シャガール・ブルーと灯台の光芒のいずれも幻想と癒し。四句目、言い得て妙、虚を衝かれた。五句目、六句目、鋭い皮膚感覚と豊かな感受性を見た。

同人作品 六〇名より七名
各々七句ずつの力作より抒情からの余情味溢れる共感句を各一句紹介。

夜振火にたしかなむかしあり、現
これきりの人の日焼の肩を抱く
そらみみも空胸もあり緋のキャンナ
ミルフィーユの層を数へて春惜しむ
琅玕の水のほとりを秋茜
緑蔭の風はすべてを宥して
秋声のそつと来てゐる白湯を出す
遊牧集 一八名 代表選 佳作を紹介

まいまいやはじめは青い空だった
向日葵の真昼どこかが暗くあり
梅雨の蝶シテのごとくに現れぬ
村上 葉子

塩野谷 仁
松戸 圭
清水 伶
三橋 三枝
石橋 翠
伊藤 道郎
矢田わかな

北山 暁亀
岡 みづき

小林たけし

「遠交近交」「好句を探る」「遊牧の一句」「現代俳句雑感」「遊牧秀句合評」「古句を歩く」「前号同人作品品評」「推薦15句選」「句集往来」「俳誌探訪」「一句鑑賞」等全員参加の気概に溢れ、研鑽を積んでおり、更に月例吟行会も励行されている。正に兜太の俳句精神の真髓の継承を目指しているのである。

山本鬼之介 選



兄嫁の秘密の漏路茸狩
山栗の風に吹かれて落つる音
沢石に挟まる胡桃抜いてやる
ちちろ虫空家に残るゐざり機
騎馬戦の騎手の少女や颯雲

鴻巣 大塚 茂子

酔芙蓉琴の姉妹の富士額
月の雨傘すぼめ合ふ京の路地
千年の都を照らす大文字
パラグライダー秋夕焼に接近す
秋の夜や義太夫節の一の糸

さいたま 保坂 翔太

ラジオより明治の唱歌木の実独楽
黄葉や帝都の駅は赤煉瓦
土壁の一茶の旧居草紅葉
畔道をじんじんばしよりゐのこづち
焼肉をたつぷり喰うて冬用意

さいたま 染谷 正信

朝日影とんばうの湧く峡の川
公園を子らの高声茸生ゆ
スポーツの影の交叉の爽やかに
しやらしやらと引く波の音秋さびし
小気味よき別れの言葉草の実飛ぶ

曲淵 徹雄

秋の川面影橋の暮れ残る
彫り終へし仏師の背や秋の川
郵便受けに送り主なき落葉かな
迷ひつつ送信を押す秋思かな
秋しぐれ最終章に浸る夜

川口 野田 静香

敬老日友は杖つき会場に
肩書きを棄て会話もはづむ敬老会
寂しさや友の病みたる秋の空
忘れたきこと多き浜辺の秋思かな
浜菊や灯台飾る裾模様

さいたま 田中 章嘉

酒林冷まじ三輪の社かな
冷まじや十三日の金曜日

秋思ふと不羈もて余す放れ馬
山辺の道妻恋へば濃竜胆
秋高し義足の軽きアスリート

落鮎の命ひしめく浅瀬かな
昨日より濃き飴色に吊し柿
稜線まで色を重ねて夕紅葉
野猿まだ人里に来ず秋祭
辛うじて老いも駆り出し秋祭

案内の特任教授秋の古都
秋の園チャイムの響く花時計
江戸展の写楽の首絵いぼむしり
余生なれど青春讃歌レモン切る
無住寺の不審伝説曼珠沙華

鶴鴿の何の忙がし杜の午後
冷まじや友の余命を聞きし夜
武士の目鼻立ち良き菊花展
逢瀬の地むかしのままに残る虫
長き夜や三角形の二辺の和

横 浜 正木 萬蝶

上 尾 横山 君夫

行 田 近藤 徹平

さいたま 青木 鶴城

遠野路は行き交ふもなく秋の声
秒針はメトロノームか虫の囀
諍の国境を越え鳥渡る
丹精の菊山門に勢揃ひ
ゆきずりの一寸立見の村芝居

採れたたての茸商ふ飛驒の里
国産の松茸王座守りたり
微温湯に肩まで浸かり聴くちちろ
徐に空録して松手入
茸籠背負ふ人なし過疎の村

虫の音の満ちゆく峡の露天風呂
大事さうに子の手の中のちちろ虫
松茸や視線集まる焼け具合
缶蹴りの蹴りあく音や鱗雲
虫時雨今宵の空を凌駕せり

秋声や単身赴任つつみこみ
菊かほる路地をひと月まはり道
橡の実の水門の今水は無く
物売りの声が遠退く秋の暮
街灯の蒼路面に刺さり冷ましき

さいたま 加藤でん治

高 崎 原田 秀子

熊 谷 越田 栄子

草 加 河野はるみ

山鳩の鳴きやまぬ日の秋の暮

さいたま 洪谷きいち

貼り紙は店仕舞かな秋の暮

桂浜より送る写メール十三夜

さいたま 新 曆文

秋澄むや凜として正倉院

勢ひの弱き噴水秋の暮

柳散る河岸に繋がるさつば舟

傘に入る二人の銀座柳散る

柳ちる濡れし舗道をハイヒール

秋時雨「夕焼け小やけ日が暮れて」

秋日和骨の髓まで蕩けたり

若 狭 飛水 鼓

歓声も悲鳴も子等の蝗捕り

東 京 石川 理恵

手の中の栗持て余す散歩道

入り日浴び顔を染めたる案山子かな

壊さるる土蔵に落つる熟れ棗

麻酔効くまでの時間を鴨の声

紫蘇の実や小さき幸せ掌の中に

同じ日に吉報訃報小鳥来る

へりくつを言ふ人も居て唐辛子

色鳥や句集に挟む処方箋

年新た古希を迎ふる覚悟せり

さいたま 日高 徹

子ら多き時代の校舎鳥渡る

さいたま 橋本 京子

大空に蒼ゆきわたる大旦

出席に印す葉書や菊日和

初詣馴染の茶屋の串団子

番頭の杉玉作り鳥渡る

新玉の光と風の二重橋

隣家より小菊一枝届く朝

初場所や隅田の風に触れ太鼓

木犀の香りに窓を開け放つ

唐松の黄葉あやなす別天地

宮崎チアキ

本名と併号を持ち秋の草

若 狭 山崎 郁子

中途半端に開けおく窓や秋の風

秋草を手向け華やぐ無縁塚

かき消えし女兒の行方や露寒し

螭螂や少年棒を持ちたがる

芋の茎色濃くなりぬ山畑

螭螂の異星人めく顔かたち

あるがままの己をさらし秋夕焼

十六夜や割れ煎餅を買うて来し

君に一献里の名代の今年酒
御当地の萩焼二つ新酒酌む
柿の荷の男結びにある矜恃
果て見えず土手に列なす彼岸花
泥水の路地に木犀花こぼす

さいたま 斎藤 みよ

体験の絵付けの皿や照紅葉
紅葉の苑佇たせて見たき舞妓はん
付き来たる夜道の足音あむとそぞろ寒
天災の恐さ語りつ菊脛
控へ目な祖母の味する菊脛

さいたま 熊倉千重子

朝市の松茸燦と飛驒の里
小鳥来る静かな午後の尼僧庵
鳥渡る村に手作りパン屋さん
晚鐘の聞こゆる里に秋惜しむ
見沼田の入り日眺めて秋惜しむ

笹本 啓子

笑栗のはねてころがる峠かな
神木の洩らすささやき秋の風
溪流に踊る木もれ陽秋の風
畦みちに小花ののぞく野分あと
せせらぎの飛び石渡る秋の風

秋本カズ子

腰痛を押して戸外へ秋日和
温暖化止めねばならぬ秋出水
巖かや秋雨に立つ万歳ばんざい櫓
新天皇即位礼の儀秋の虹
秋澄めり天皇御袍の黄櫨おうじ染

東京 太田 絹映

藍瓶の藍の底より秋の声
ざわざわと森押し分けて今日の月
吾亦紅じやんけんぽんと手を開く
縁の欠く壺に紫苑の真つすぐに
冷やかや握りたき手の見つからぬ

下川 光子

独り居の庭のこほろぎ気負ひたつ
ちちろ鳴く生きざま競ふ過去未来
松茸が舌を満たして言盗む
今日一日素手を携さへ秋の暮
子等たはむる木の実しきりに落つる中

熊谷 神田 治江

コスモスにタッチしながら一人旅
朝一で赤飯届く敬老日
住職と立ち話して秋彼岸
冷まじや閉店ですと立看板
終活の指南書数多秋思かな

東京 石田 慶子

天の川上り列車の遠汽笛
溜息にかすかに揺るる天の川
秋入日しばしたためらふ海の際
広がりてまた集まりて小鳥来る
コスモスと共に揺れたし今しばし

伊予 向井 章子

文字太き手書きの案内「菊花展」
蹲踞に白菊浮かべ客を待つ
無造作に活けし小菊のころろざし
変身の夢が叶はず秋闌くる
児の燥ぐ声や菊花を筆りをり

さいたま 秋山 紅花

荒川大地めざして群の小鳥来る
栃の実落つ山路に古き一軒家
木々の間がみずみの実の自己主張
味噌を詰め焼きたる通草鄙の酒
人気なき段々畑の赤りんご

さいたま 西幅 公子

台風の近づく中の美粧院
野地蔵の頭巾飛びゆく台風禍
復興の鉄路を仰ぐ曼珠沙華
大敗を喫する野球天高し
列長き印象派展鳥渡る

平塚 丸屋 詠子

藤村の初恋の詩林檎喰ぶ
林檎より映ゆる地蔵の赤頭巾
この時季の至福の時ぞ土瓶蒸し
助走するアキレス踵や天高し
曼珠沙華心の中を風通る

梅澤 輝翠

船旅の白きトランク露寒し
秋冷の血を燃やす曲アンコール
腹這ふも歩兵の務め八頭
若嫁や芋の小口の座り佳し
トムとジェリー追ひ駆けつこの芋つるり

さいたま 大槻 瑤蘭

自販機に通草のからむ郷の家
大根蒔き友と笑顔を交はしけり
気怠さの残る目覚めや秋暑し
二人さりまた一人逝く秋彼岸
かなかなや空の蒼さを包み込む

水野 興二

玉砂利の音が續きて菊花展
走り蕎麦幟の文字に惹かれ入る
朝寒し一葉色付く植木鉢
菊の宿から望む鉄橋寸又映
走り蕎麦残りわづかにカレンダー

村杉 清吉

柳散る湯の「城崎」を一人旅
夕暮をいと早めたる秋時雨
正調の木曾節沁むる暮の秋
イントロの調べ懐かし秋の暮
正客の野点の捌き紅葉山

川口 田村 節子

秋出水予報は知るも動かれず
大鴉群れて声高台風禍
爪立てば木隠れの富士初冠雪
新豆腐ゆれて施設に夕餉の灯
爽やかに背高き看護実習生

横浜 山岸 弘子

ひた濡れて白白と立つ貴船菊
大覚寺なれや嵯峨菊咲き揃ひ
菊花展ぼつりぼつりと老爺来る
朝寒し内より冷ゆるサドルかな
朝寒やブーツを磨く土間暗暗

さいたま 山口 韶子

陽を残す秩父連山秋惜しむ
秋惜しむ茶店の椅子を詰め合ひて
数珠玉や水路に小さき橋いくつ
数珠玉や笑ひ上戸の友とあて
数珠玉のお手玉美しき色づかひ

さいたま 森 和子

浅学に手探りのまま吾亦紅
病む夫の浅き眠りや身にしみぬ
秋風や湖に崩るる岩の嶺
解体の足場を抜くる秋の風
吾が背ほどあれよあれよと菊育つ

山戸 美子

時打たぬ柱時計や夜長し
長き夜や手垢のつきし電子辞書
歳時記の綻び直す夜長かな
萩白し父の硯で五七五
ひとり暮し何時迄続く萩の庭

高橋 敏子

ふるさとの山並かすむ秋時雨
寺の庭箒の音は黄柳か
今朝よりは一枚羽織る秋時雨
正座して見上ぐる窓のみの虫よ
秋時雨水が集まり水の声

塩野 久子

わが庭に交はり繁き虫時雨
白檀の香る仏間や秋の暮
秋時雨山美しく駒走る
柳散る東銀座のティータイム
神無月衿を正して旅に出る

新井 孝磨

古希祝ひ心尽しの土瓶蒸し
渡り鳥都内の池で羽根休め
懐しき糶殻箱の林檎かな
助手席の地図を頼りのもみぢ狩
挨拶かはす金木屋の通学路

さいたま 小川 洋子

山の端に秋気ただよふ過疎の村
出迎への女将はんなり秋拾
温泉に浮ぶ小さき五体に月影り
応へなき一生あれこれ宵月夜
おしやれして競ふも楽し色鳥来

東京 河原 叔子

灯下親し子の音読に引き込まれ
灯下親し写経する夫背丸く
難解の古典に挑み灯下親し
食卓の真中二色の菊脛
口中に母の想ひ出菊脛

松田 朋子

川 崎 鈴木 玲子

紫の脈しつかりと花桔梗
哲学の道文人然と秋思かな
青春きつぷボックス席の秋思かな
連弾の指先に傷秋思ふと
黄楊櫛の祖母の香かすか菊枕

雨を吸ひ雨を弾いて栗の実落つ
振り返り又ふり返る枯野かな
さこの汁子等はそつぽを向きにけり
満月や月葉と名づけほほ笑まし
冬の朝庭師の仕事正午より

伊藤 愛子

さいたま 反町 修

払暁の厠の窓に秋の声
竹林に瞑目すれば秋の声
のつぽビル墓石のごとし秋夕焼
辛党の父の遺影に新豆腐
草相撲負けてべそかくいじめつ子

葬送の一本道や鰯雲

和歌山 宮井美恵子

所 沢 関根 千恵

葬列に紛れてをりし秋の蝶
匂ひあるのを知りたり夜の花芒
喪の家の朝の小窓に小鳥来る
新米研ぐ手に老いの斑のふたつ三つ

湖の陽の衰へて初冬の音
小春風追ひかけてゐる観覧車
持ち主の無き手袋のアップリケ
電話かけ掃除機をかけ蒲団干す
来る風と去る風一気冬の風

尾をたたき命を示す銀やんま
赤とんぼ止まる地蔵の赤頭巾
転た寝の手枕しびれ夜長かな
夫逝きてつくづく知るや長き夜
別れ来ただ彼のこと秋彼岸

杉戸 佐々木史女

一日の至福の床に蚊の名残
おでん煮るのれんくぐれば昭和かな
下町のささやかな日々花茗荷
新米を磨ぎて皺の手洗はるる
風の指揮オーケストラに秋の虫

大阪 飯塚智恵子

晩秋や顔に張り付く巢を掃ふ
松茸や五感ふつつ土瓶蒸し
閉ざされし峠の道の草紅葉
通販の品定めする夜長かな
キャンプ場眠る湖畔に小鳥来る

さいたま 竹澤 和子

飛び立ちて風の形に稲雀
稲雀幟揚がりし村社
秩父より武蔵へ渡る鴨の群
蝗飛ぶ千枚田への細き道
籠の蝗十匹足らずが数へられず

町田 瀬戸雄二郎

移り来て地酒で和む秋祭
どんぐりかへで仲良くもみぢ子らの声
輝きや全樹真黄の銀杏黄葉
落鮎や那珂川宿の灯の淡し
落鮎を見送る空の真青なり

栃木 佐々木典子

墨東の風をお供にこぼれ萩
風の中人影消ゆるこぼれ萩
楯円球の思ひ反する長き夜
肉弾戦熱きラガーに夜長かな
長き夜の絵手紙談義赤ワイン

さいたま 福田 育子

老いてなほ案山子すつくと骨自慢
捨案山子極悪面を晒しをり
コスモスの大波小波子ら隠す
コスモスや戦後此処いら諸島
銀漢や草津湯の街湯の流れ

東京 水落 守伊

戦中に飢ゑたることも愛の羽根
色鳥や山川草木豊かなる
三昔も住めば地の人ぬかご飯
大荒れの天気予報や実紫
秋の夜や覗いてみたき土星の輪

いすみ 平石 睦子

虫すだく夜の訪れいつの間に
齒ざはりと香一番茸汁

東京 鈴木 和子

母と手をつなぎし暗き虫の秋
松茸ご飯香りて目覚め今朝の空
持ち味をいくつも合はせ茸鍋

鱗雲飛行機雲を捕へけり

一歳 細井 良子

暮早し超特急の尾灯追ふ

新築祝月を愛でつつ盛り上る

月明り犬を散歩に連れ出しぬ

吾亦紅どつさり活けて野の景色

めんどりをつつくをんどり秋のひる

さいたま 飯田 忠男

何処だらう芝刈りの音秋の昼

計らずもこの世に生まれ蚯蚓鳴く

得得と釈迦に説法秋の蝶

1013ヘクトパスカル檸檬熟る

爪先が人肌恋ふや秋さみし

吉川 杉浦 理恵

駅飾る黄菊に浮かぶ好好爺

風に任せて「忠次」の里の秋を行く

スカイツリーが舍利の塔めく秋の暮

菊むしる恋の占ひするやうに

捨てかねし父の賜杯や秋深し
孫を抱く息子の白髪秋深し
紅葉寺女三人正座して
野紺菊過去帳になき生母の名
焼きたての秋刀魚にたらずバルサミコ

さいたま 田中 泰子

屋上に登れば銀河我のもの
茶柱が湯のみ茶碗に秋澄めり
名月や夫と手を取りゆく堤
秋天や槌音ひびく屋敷跡
家家の明かり優しき暮の秋

高原 和子

黍風すぐに通ずる国訛
郵便物持ちたるままに秋夕焼
欣喜欣喜曾孫出来たぞ望の月
大南瓜終には鉦の力借り
闇雲に鍋釜磨く秋思かな

横浜 川島 典虎

夕すすき一軒茶屋には道半ば
寄り添うて影法師踏む良夜かな
隧道を抜ければそこは秋祭
奇をてらひ腹芸見せる今年酒
焼鳥を三本あてに新酒酌む

さいたま 白田 みち

天高し組体操のきびきびと
綱引に助つ人あまた秋暑し
運動会の父撮るビデオぶれにぶれ
ハロウインの主役となりし大南瓜
古手帳に二人の出合ひ秋桜

和歌山 高橋満耶子

赤鉢巻のチビの駿足運動会
天高しパパが本気の徒競走
抱っこしたまま走る先生運動会
開脚跳びの山こえ野こえ運動会
応援の泣く子をあやす秋の晴

和歌山 葛城千世子

椎茸や故郷の味を忘れぬ
蒲鉾に飛びつく亀や秋の夕
巨大鯉穴場に集ふ秋の川
蓑虫や思案のはての糸とけず
秋庭の小人の陶器福を呼ぶ

和歌山 南條きわゑ

榎櫃の実又三郎が駆け抜ける
秋霜や名知らぬ草の茎の紅
子等居ねどどんぐりあまた公園に
石路の花庭一面に吾子出立
秋草や民の憲法生みし街

宮代 関谷多美子

山海に命満たして秋遍路
灯と経の洩るる御堂や朝寒し
晚鐘に頭たれたり豊の秋
刈田道田烏弁の鯛売り
園児らが大きな栗の木の所で

小浜 松島 寛久

吾もまた人生半ば渡り鳥
澄み渡る日本の空よ菊花展
白菊のきちつと並ぶ長屋門
秋空や外壁白き天守閣

さいたま 千坂 平通

下戸なれど新酒一杯頂戴す
白足袋の絆はじける秋祭
屋台酒新酒と云はれもう一本
墓参り妻に一言ぐちを云ふ
三千院しとねに欲しき散紅葉

さいたま 川村 治

聞き分ける風音栗の落つる音
雨音にトライ重ねし残る虫
駆り立てる記憶の中の刈田風
燃え立つやフラメンコ舞ふ唐辛子

若狭 岡本 祥子

葺き家の柿ある日暮れ道
前略と書きて思案や秋なけば
一輪を足して寄り添ふ良夜かな
駆ける子のあと追ふ杖や竹の春

若狭 檜鼻ことは

運動会終へたる子等に陽の匂ひ
かみ合はぬ夫との会話虫すだく
病室の窓に取り込む後の月
里芋をむけば懐かし祖母の指

和歌山 嶋田 洋子

草の実と共に弾くる子犬かな
草の実も仲間に入るや百花園
甘露煮の匂ふ茶店や下り鮎
甘露煮を揉む手に染むる甲斐の風

春日部 諏訪サヨ子

学校田アイドル風の案山子立つ
交番の鉢のコスモス揺れてをり
好天にギョロ目効かせる案山子かな
コスモスを花粉に塗れゆらしをり

東京 柳父 はる

穂を垂るる明日香の棚田秋うらら
行く秋や白樺の幹くつきりと
新蕎麦や各駅停車で奥会津
草の実の一粒づつが自己主張

草加 外村 紀子

月の出を待ちて団子をにらめる児
色鳥の前世はいかな人なるや
呼びおうて月夜の道を伸のよし
秋の夜やメールの文字に人の声

橋本 竺仙

赴任地の大地踏み締め星月夜
終電待つホームに優し星月夜
町会を仕切る面面吊し柿
鯖鮎や淀む水辺の色模様

さいたま 安倍 弘夫

年経るも腑におちぬこと秋思ふと
青信号手をあげ渡る子のさやか
土手の秋住み家失くせし猫一匹
不眠症抱へし夫の菊枕

畑宮 栄子

木瓜の実の武骨な拳夕日中
街角の芒一株風美しや
実南天色なき庭に紅をさす
サスペンス夜長の黙に喰らひつく

菅原 真理

朝日射す氾濫の川鳥渡る
秋寒の門前町を僧の列
秋晴や息を弾ませ介助犬
裏山で松茸採れる婿の村

さいたま 野村 美子

認知症の友を追ひかけ残る菊
残菊に百葉箱の白光る

さいたま 山下ユリ子

野地藏の供花の乾びし暮の秋
曇天のひそひそ話花八手

地芝居の人情話で泣き笑ひ

湯浅 和

秋の灯を「元」まで消せぬミステリー

野仏の後光とみゆる烏瓜
長雨になほ艶増すや烏瓜

籠回す小川の流れ芋洗ふ

櫻井よし江

秋出水ホームに浸かる新幹線

日蔭山ふくれつつらの花梨の実

星月夜地酒に酔へり鄙の宿

紫蘇の実を天ぶらにして母忌日

森下美智枝

銀杏を踏みて急ぐや待合せ

手入れせし庭に早くも秋の霜

切り立ての太き切株秋の霜

捨て猫と一緒に入る炬燵かな

鬼石 加藤ナヲ子

新米の甘き香りを供へけり

勝ち進む男子バレーや秋の夜

から松の林の奥に鴉の声

東京 飯室 夏江

タクシーを待つ最後尾ちちろ鳴く
仕舞風呂ゆるりと入れば虫の声
残業の続く事務所やちちろ虫
「おもたせ」は松茸狩の名人と

さいたま 長井喜代子

数珠玉を植ゑし店主の心意気
ひたすらに七曜埋めて秋惜しむ
誕生日過ぎて気忙し秋惜しむ
数珠玉の青き実艶めく朝まだき

藤 沢 小島喜代子

娘や孫と暮らす生活や萩の餅
隣から枝ごと届く柿二つ
台風過安堵の朝風呂手足伸ぶ
台風の話題ばかりの誕生日

川 崎 板子由美子

蝗捕り従兄の後を追ふばかり
誰の田かお構ひ無しに蝗飛ぶ
ごつい手に二枚持ちたる愛の羽根
新聞と葉袋のある秋思

さいたま 横山 礼子

吾亦紅捧げし君の手やはらか
台風禍ベテルギウスも黙禱す
智恵子抄の檸檬は遠し今 Lemon

木村るみ子

秋の蝶空にクレーンの現はるる
道迷ひビルの谷間を秋の蝶
朝陽さす万葉の径曼珠沙華

土光り玉葉の丘の秋の暮
秋桜のベンチの上に観音堂
豪農の館の庭の花薄

さいたま 小駒さち子

あやとりの川が流るる秋の夜
台風や夕餉の卓のローソク火
秩父路のみぢトンネル人の列

さいたま 武田 重子

高原の風と戯むる秋茜
蛸や家路を急ぐ女たち
木犀の香りに惹かれ入る路地

岡田 宣子

図書館に工事の予告秋灯
秋灯母の日記に恋の歌
草の実や地価高騰の空地かな

鈴木 藻好

金の紗を下すがごとく秋夕燒
鉢植糸の葉にも柚子坊隠れをり
秋あかね何を思うて飛び交ふや

小山 敦子

数珠玉を拾ひ集めて胸飾る
草むらに数珠玉の実持ち帰る
川の面に木の葉が浮かび秋惜しむ

内田 雅代

髪なびく大気は澄んで秋惜しむ
秋惜しみ免許返納して歩く
故里や数珠玉ころころ転がりぬ

落合 和枝

塩加減つるり柔肌衣被
秋の声聞こえくるよな神の杜
秋簾主無き家にぼつねんと

佐藤 克之

吊橋に冷汗三斗紅葉谿
虎落笛何処で吹くやら闇を裂く
砦敵を虎視眈々と待つ新茶

小川 藤間 友二

夜通しの風の土産や栗拾ひ
山下りてマルメロに会ふ道の駅
秋霜や郵便受けの音静か

越谷 阿部 幸代

旬到来箱の松茸ちらと見る
ちんちろりん我の散歩に連れだちぬ
黄昏の野辺を自在にきりぎりす

さいたま 緒方みき子

村芝居猥取り施し出番待つ
落蟬の羽ばたき最期静まりぬ
糴田やなほも青々二番の穂

三郷 沼尾 岳

椽の実を競ひて拾ひあひにけり
魅了され庄倒されて曼殊沙華
ラジオつけ荷物まとめて秋出水

鬼石 榊原 聰子

メール来て婆友ランチ栗ご飯
子規庵の糸瓜みごとに七つ八つ
文字の意味繕き楽し夜長かな

さいたま 綿貫ひさの

作品評

山本 鬼之介

兄嫁の秘密の漏路茸狩

大塚 茂子

本句の季語である「茸狩」は、春の山菜採りと同様に、その道の達人ともなれば、茸の見分け方や茸が沢山生えている穴場など、その人なりのノウハウがあると思う。句に詠まれている兄嫁もそのような技能を持った人達の一人で、家族や周囲の人達が驚くほどいろいろな茸をどっさり採ってくるのだと思う。「漏路^{くへち}」抜け道「近道」と云う意味から推察して、何時の日かに兄嫁が、山の中で近道をしようとして獣道に入り、そこで偶然に茸の穴場を発見した、と云うように解釈した。兄嫁はその場所を秘密にしている、茸のシーズンになるといそいそと其処へ出掛ける。作者にとっての兄嫁であれば茸の産地は秩父であり、さぞかし美味い茸が採れるのである。「漏路」の言葉を見付けて使ったことで、実に新鮮味のある俳句になった。

パラグライダー秋夕焼に接近す

保坂 翔太

大昔より人間は、空を自在に飛ぶ鳥と同じように、己も飛んでみたいと云う欲望に駆られたことであろう。その思いが、ライト兄弟による動力飛行機の発明と実用化に繋がったが、人間が抱いた夢は、鳥と同じように大空の風を肌身に直に感じて飛ぶことであつたと思う。そのように考えてゆくと、掲句のパラグライダーはその夢を実現したことになるか。鳥が翼を自在に操るように、パラグライダーの左右の操縦索を操作して滑空する。筆者は経験が無いし、これから体験することも有り得ないが、この句を読んだだけでその爽快さが伝わってくる。夏ほど強烈ではないが、雄大な秋の夕焼け空を目掛けて飛行するパラグライダーの勇姿を描いた傑作である。

畔道をじんじんばしよりあのこづち

染谷 正信

不勉強で「じんじんばしより」の言葉の意をよく解さず、辞書やインターネットで調べた結果、「爺端折」の転訛で、これまでにいろいろの場でその格好を見ていたことが分かった。幼少時に疎開先の若狭で見たお爺さん、安来節の民謡踊（泥鰌すくい）、祭の光景、時代劇ドラマなど、納得のゆく格好である。この句の人物像は「畔」「牛膝」から想像して好々爺然とした田舎の爺様で、秋祭の帰りであろうか、ほろ酔い機嫌で風呂敷包みを提げて畔道を歩いてくる。薄手の股引に牛膝が沢山付いていて、長閑な田園風景が広がっている。日本の原風景の一つであろうか。

スポークの影の交叉の爽やかに

曲淵 徹雄

スポークを有する乗り物を前提とした俳句である。乗り物の種類として、自転車・オートバイ・車椅子などが挙げられるが、下五の「爽やかに」の語感かる受けるイメージは最初に挙げた自転車である。走っている自転車の斜めから陽が射して反対側に影ができる。爽やかな秋風を身に受けて走る自転車の人の気持を、規則正しく組まれたスポークによって表したものと解した。「交叉の影」であるべきものを「影の交叉」としたところに妙味がある。

秋の川面影橋の暮れ残る

野田 静香

面影橋は、神田川に架かっている橋の名で、その近くにある都電荒川線（東京さくらトラム）の停留場名にもなっている。橋の名前の由来は諸説あって確定し難いようだが、姿見の橋と云う別名もあり、太田道灌の山吹の里の地とされて、江戸時代から明治時代には、名所の一つであったと云う。秋の川と云う平易な季語と変哲もない橋を結んだ俳句であるにも拘わらず心に響いてくるのは、架空の橋の名としてこの句を読んだ時のイメージの広がりと思ふ、そして、「暮れ残る」が誘因する現実感だと思ふ。

忘れたきこと多き海辺の秋思かな

田中 章嘉

永い人生の中でよい想い出もある反面、人によっては逆の想い出も多いのかと思う。寂しさと呼び込む秋の季節感と自分しか居ない海辺の景色と規則正しい波の音。こうした雰囲気の中で、普段とは違う気持の高まりが生ずるのである。嫌な思い出を全て海に捨ててしまいたいと思う秋思である。

秋高し義足の軽きアスリート

正木 萬蝶

東京オリンピックと共に同パラリンピックが刻々と近づいており、参加するアスリート達は、日頃の練習に余念が無いことだろう。特に、陸上競技用義足の要である弓幹ゆがたのような板発条はなはの開発が進み、健常者に負けぬような足運びに感激する。競技場を力強く颯爽と走る義足のアスリートを、作者も同じ思いで見ているのだと思う。高く澄みわたった秋空が、義足のアスリート達に声援を贈っている。

稜線まで色を重ねて夕紅葉

横山 君夫

山裾から山頂まで全山こころようの景観である。日が進むに連れ、また、一日の時間の経過によって微妙に色合いが変わってゆく。夕焼け空を背景に黒味を帯びた紅葉には格別の趣がある。「稜線まで色を重ねて」が秀逸である。

無住寺の不審伝説曼珠沙華

近藤 徹平

古くからその寺に纏わる伝説が周辺の人々の間で語り継が

れてきたが、内容についての真偽のほどが明かでなかった。

ましてや、住職不在の現状ではお手上げ状態である。某年某月某日、その寺に立ち寄った作者。伝説の手掛かりでもと思つて寺の境内や内陣を見て回つたが、成果は得られなかつた。無縁墓地を取り囲む曼珠沙華が、嘲笑つているように見えた。

逢瀬の地むかしのままだに残る虫

青木 鶴城

過去の逢瀬の時間を甦らせるのに相応しい街の一角と建物。昔のあの時と同じように、疲れたように鳴いている晩秋の虫。もう元には戻れない時間が経っている。

ゆきずりの一寸立見の村芝居

加藤でん治

子供歌舞伎や木偶人形芝居など、伝統芸能が連綿と受け継がれている土地がある。気儘な独り旅のひと日、町をぶらついている恒例の素人歌舞伎が催されていたので掛小屋の隅から潜り込み寸暇を楽しんだ。「ゆきずりの」から始まる一句の快いリズムについてのせられてしまった。

徐に空缺して松手入

原田 秀子

松の手入れには特別な技術が必要で、本職の庭師といえども一枝一枝に神経を集中して仕上げてゆく。どの葉を剪るかを考える間と手捌きのリズムを取るための空缺であろう。その音を聴きながら、午後のティータイムを過ごしている。

虫時雨今宵の空を凌駕せり

越田 栄子

「今宵の空」は、耿耿たる月の光に満ちあふれる秋の夜空を表している。そのような夜空さえも凌ぐ虫の声である。さらに一管を吹く人が居れば、まさに古の王朝絵巻になる。

橡の実の水門の今水は無く

河野はるみ

永い年月の間に水涸れとなつた水門の脇に大きな橡の木がある。昔も今も、その時季になると、橡の実が水門に落ちる。落下するまでの光景は変わっていないが、明らかに音質が違っている。何時頃から水が無くなったのだろうと思ひながら、橡の実を拾っている。

秋澄むや凜として正倉院

渋谷きいち

小学生の頃から校倉造とともに聞き親しんできた正倉院。高さ一四メートルの木造大倉庫の偉容は、晴れ渡つた秋空に映えている。その姿を「凜として」と表現したことで、国宝建造物の価値が高まつた気がする。五・五・六の破調が効果を為し、きりつとした俳句になった。

紫蘇の実や小さき幸せ掌の中に

飛永 鼓

秋になると枝先に芥子粒ほどの穂状の実をつける紫蘇の実

は、芳香や歯触りがよく、青紫蘇は刺身の具・天麩羅・佃煮・塩漬・薬味など、赤紫蘇は梅干・柴漬など、食材としての用途が多い。さて、本句に書かれている紫蘇の実は、如何なる状況にあるものか。畑から採ってきた青紫蘇の実を掌でしごき採っているのかと創造する。掌に伝わる心地好い感触に、土に親しむ身としての歓びを実感しているのだと思う。

初詣馴染の茶屋の串団子

日高 徹

寺院か神社の境内にある茶店か。上品な御手洗団子ではなく、大振りで醤油を絡めた串団子ではなからうか。筆者の経験では、川越・喜多院の茶店の団子がびったりである。離れた処まで醤油の香ばしい匂いが届き、たとえ腹が空いていなくても、ついつい誘い込まれてしまう。作者の地元から類推すれば、調神社の出店かも知れないが、何れにしろ、初詣の高揚感を高める効果がある。

中途半端に開けおく窓や秋の風

宮崎チアキ

窓を開放して秋風を入れるのは心地好いものだが、その日の気温によっては肌寒さを感じる。中途半端な開け方と云うのは、窓を半分か三分のほど開けることかと思うが、その開け方に問題があるわけではなからう。しかし、この俳句を讀むと、不満めいたニュアンスが汲み取れる。作者にとつてどつちつかずの窓の開け方が気に食わないのだろうか。

助走するアキレス腱や天高し

梅澤 輝翠

神話に基づくアキレス腱は、特にスポーツ選手にとつて重要な腱で、疾走や跳躍の際に断裂を起こすことが多い。助走から察して、競走・走幅跳・棒高跳などの陸上競技であろうが、アキレス腱を選手自身に見立てたことが素晴らしい。

自販機に通草のからむ郷の家

水野 興二

自販機が設置されているのだから一般の民家ではなく、多分村里にある何でも屋だと思ふ。通草の蔓が絡みついた自販機を想像すると、その村の長閑な暮し振りが見えてくる。

復興の鉄路を仰ぐ曼珠沙華

丸屋 詠子

今年、超大型の台風が日本国内の各地に多大な被害をもたらし、人命や家屋、田畑や道路、そして、鉄道施設にも甚大な損害が生じた。不通になっていたローカル線がやつと開通し、利用客の歓びの顔が、曼珠沙華の沿線に輝いている。

菊の宿から望む鉄橋寸又峡

村杉 清吉

一九六八年二月二〇日に起きた金嶺老事件の寸又峡（大井川鐵道の谿谷）である。俳句の時代性と「菊の宿から」の柔らかな導入の言葉に魅了されて抽出した。見事な菊であろう。

水琴窟

(水明集鑑賞・十一月号)

池田 雅夫

点火の瞬間息を凝らして大文字

鈴木 玲子

八月十六日の夜、京都東山の如意ヶ岳山腹に「大」の字形の薪に火を点じる送火。また、五山の送火を総称して「大文字」と言われる。細やかな表情、感情の表れを鋭く観察している。上五の大胆な字余りに万感胸に迫るものがある。

法螺吹きしあとの高揚梅雨の明

杉浦 理恵

人の心理を捉えた興味深い句である。「うそ発見機」のように心理状態の変化に注目したところに感心する。小さなうそでも罪の意識がはたらき、顔が赤らむなど態度に表れてしまふ。うそが見抜かれたことが「梅雨の明」で明々白々。

蛸や山の麓に点く灯り

千坂 平通

暁方や夕方に鳴く蛸はどことなく悲しげで哀れでもある。山麓の夕暮は早く、家々は灯りを点け夕餉の仕度に忙しい。夕焼け雲は次第に鉛色に変化し、おなかを空かして帰って来る子もいるだろう。静かな山麓の家の日常が垣間見える。

この指に誘つてみる赤蜻蛉

緒方みき子

空を埋め尽すかに群をなして飛ぶ赤とんぼ。かと思ふと、垣根などの低い木や草、庭先の竿など突き出した細い先端によく止まる。人差し指を天に向けると止まってくれることもある。童心に帰って安らぎの一時を充分に楽しんでみる。

あめんぼの下をゆうゆう鯉のゆく

森下美智枝

「あめんぼ」の名の由来は、その匂いが鮎に似ているからという。が、捕まえて匂いを嗅いだことはない。水面をすいすいと走る。一方、水中では鯉が無頓着にゆうゆうと泳いでゆく。それぞれの生態のちがいをみごとに詠んでいる。

補聴器が捕ふる風や秋の声

小島喜代子

聴覚の鋭い人でも「秋の声」を聞き分けるのは至難の技。それが補聴器というからおもしろい。生身の耳には聞こえない何かを、機械的な性能が拾い出したのかも知れない。直接「秋の声」と言わず、風を捕えたところに俳諧味がある。

猛暑中眉間のしわの取れ難し

柳父 はる

発想の特異性に感心した。ただ「暑い、暑い」と呟くだけでなく、歪む顔の表情に注目したところがいい。暑さの度合いが並でないことがはっきり分かる。熱中症にはご用心。

茅葺を包む朝もや蟬の声

湯浅 和

茅葺屋根の家が点々とした山村であろうか。朝もやは一日の晴れの兆候。この二つの幻想的な事例を並べ、そして「蟬の声」ときつちり締め括っているとかがよい。その蟬はかなかな蟬にちがいない。郷愁をさそう光景が目につかぶ。

老木にしがみつき鳴く法師蟬

櫻井よし江

法師蟬に止まるのは、やはり老木がふさわしい。その鳴き声は独特な味わいがあり、いろいろに聞きとられている。複合動詞の「しがみつき鳴く」が句を複雑にしている。「しがみつきみて」とすれば、「鳴く」の語が省略できる。

大西日高層ビルに乱反射

長井喜代子

「乱反射」とあるのでビルの向きがまちまちなのであろう。時間の経過とともに反射の角度が移動してゆく。また、日没近くなるとビルの最上階にだけ日射が残っていて、その暑さをいやというほど主張している。漢字表記も暑さを強調。

白き手と白きうなじや風の盆

外村 紀子

富山県の八尾の「風の盆」は全国的に知られている。風害を防ぐための祈願と盆の行事が一緒になったものと言われている。夜を徹して踊る踊り子の幻想的な風景が目につかぶ。

帰省子のため息ばかり高速道

畑宮 栄子

夏季休暇などを利用して故郷に帰る帰省。お盆と重なって、高速道路の渋滞は一〇〇キロメートルを超えることもあった。近年は渋滞を避け、休みを分散させることで少しは緩和されたが、渋滞が解消したわけではない。お疲れ様です。

雨降れば雨のワルツをあめんぼつ

檜鼻ことは

「雨」、「雨」、「あめ」と重ねてリズムをつくっている。故意に技法を画策すると、その意図を見抜かれ失敗しがちであるが、本句は無駄なく素直に詠んでいる。水面をすいすい走る身軽さを「ワルツ」と表現した発想がすばらしい。

木の根っこ跨ぎて進む踊りの輪

鈴木 藻好

小さな村の広場や境内での盆踊りであろうか。佳境を迎えた踊りの輪は次第に大きくなって、ついには木の根元にまで広がってしまった。「木の根っこ跨ぎて進む」に素朴な村の暮しぶりと永年の歴史の重さが見えてくる。

母の故郷は晴好雨奇や望の月

藤間 友二

「晴好雨奇」は、晴れでも雨でも山水の景色が美しくすばらしいこと。母への敬慕とその故郷のあこがれが如実に表われている。幼いころの月見を思い浮かべているのだろう。

鼓

笛

集

山中順子選



地下鉄に乗るか歩こか酉の市
持ち歩きづらさも佳きか大熊手
大熊手尻目に小さき熊手買ふ

石川 理恵

御祓ひに始む能楽秋灯
「鬼神」は人間国宝秋灯
折角の能に微睡む秋灯下

太田 絹映

見上げれば降つてきさうな熟柿かな
朝日差す茶の花白く透き通り
山門に座する大樹の銀杏枯る

秋山 紅花

賑はひの膳を想ひて小豆引く
大ぶりの露店の熟柿旅の夜
夜叉五倍子の実握る匠や黒八丈

阿部 幸代

御神楽に初参加する十五の空
教室がメイド喫茶に文化祭
濡れ縁の湯呑みの数や冬日和

梅澤 輝翠

大病院の竣工近し冬に入る
きら星のパワー授かる大枯木
和やかに暮らす一家や石路の花

宮崎チアキ

木の葉散る全山痩せてゆくばかり
鴨漂ふ池半分は森の影
単線の旅の果てなり氷見時雨

横山 君夫

三角に六羽出揃ふ鴨の陣
百二歳の姉の説教小春かな
ノーサイド額に瘤の小春かな

安倍 弘夫

鉢入れ手にずつしりと葡萄狩
子規庵や今なほぶらり糸瓜ゆれ
たつぶりの青空の中冬の鳥

鹿の目を先へそらして二月堂
奈良盆地鹿と分け合ふ夕べかな
野性秘め庭の死角に藪からし

木の葉雨主なき家に降りつもり
冬耕の農夫の肩に陽は落ちぬ
父が植ゑし柚子の実たわわ宿替へす

千年の梢に優し秋しぐれ
しならせて戯る風に柳散る
注連ゆれて鎮守の森の初時雨

紅葉恋ふ山寺目指す千余段
秋ついでり玉こんにやくの味染みて
ブナ黄葉一眼レフで月山と

小春日や今日が初日の人力車
ひとつもじは焼くが一番猪口選ぶ
焼鳥屋の前を素通りする勇氣

森下美智枝

山口 韶子

村杉 清吉

秋本カズ子

石田 慶子

森 和子

夕時雨「夕焼け小焼け」の遠チャイム
冷かや水琴窟に孫の耳
出雲へと行かぬ神あり時雨月

神無月博物館の地動説
切り通し抜けてばらりと初時雨
息止めて一房採るや黒葡萄

留守電に咳き込む声やたじろげる
此の辺りやはり今年も烏瓜
青写真上に野良猫来て眠る

冬の星息吹き掛けてわがものに
炬燵居の夫の手伸びて伸びてゆく
深呼吸胸透けて来し冬の空

ハロウインの仮装はすでに魍魎魍魎
走り去るバスへ手を振る夕紅葉
窓拭ひ風禍の秋芽たしかむる

☆

☆

新 曆文

新井 孝麿

水落 守伊

板子由美子

山岸 弘子

鼓笛集作品評

山中 順子

地下鉄に乗るか歩こか酉の市
持ち歩きづらさも佳きか大熊手
大熊手尻目に小さき熊手買ふ

石川 理恵

大宮の十日町、浦和の十二日まちが終り少し静かになった。
この頃は温暖化で暖かい。この三句は酉の市の様子を楽しく
作っている。句の並べ方も良い。結局歩いてしまったのだろ
う。だから大熊手買った方がいいが、どうしても重荷になって
来た。後悔するも先に立たない。三句目はやはり小さいのに
しておけばよかったとあきらめの句であるう。作者の心情も
さりながら楽しんだ酉の市が伝わってくる。

見上げれば降つてきさうな熟柿かな

秋山 紅花

柿はビタミンCの宝庫であつて風邪の予防には役に立つ果
物である。またインフルエンザの菌を殺す成分が含まれてい
るとテレビで言っていた。でも若い人は剥くのが面倒らしく
みかんに手が出る。鈴鳴りの柿がつまらなそうに冬の目を浴
びている風景は日本の冬を理屈なしに映している。柿は風邪
にいい果実です。沢山食べよう。

私の好きな一句（自句自解）

正木 萬蝶

この先にホスピス在りぬ石路の花

この一月に義兄（主人の兄）が七十五歳で身罷った。
十五年ほど前に愛妻を乳癌で失つて以来、独りの淋しさ
も加わり酒量が増し、アルコール依存症で入院を繰り返
す中、急性白血病で息を引き取った。

石路の花はホスピスではなく依存症の病院への途次の
風景。大分前に作った句の風景が目前にあった。これは
デジャ・ビュだと思う。

鼓笛集の書き方

- 俳句は四行目から上を開けずにお書き下さい。
- 二、三字詰原稿用紙をお使い下さい。
- 右上欄外に「鼓笛集」と朱書きして下さい。

編集部

句集喝采

井口 俊晴

◆高田敏雄「草笛」

玉梓発行所

著者略歴 昭和三年京都市生。平成十一年、大阪市鶴見区老人福祉センター俳句教室入会、名村早智子氏に師事。十八年、名村氏の「玉梓」創刊に伴い入会。「真朱集」同人。大阪俳人クラブ会員。

九十一歳の第一句集。著者は大学卒業後、二十年の会社勤めのあと、数学塾講師を二十年務めた。その後も自宅ですつと数学塾を続けていたが、平成十一年、たまたま友人に誘われて俳句教室に出席、その楽しさにのめり込んだ。

京都市生まれの著者には京都を詠んだ句が多い。吟行の時には多くの友人を連れて案内するそう。なるほど、路地の奥まで知り尽くしているのが分かる句があった。

鉾立や先づ荒縄を水で締め
詩仙堂風が色足す紅椿

秋時雨抜けられませんこの路地は

著者は「あとがき」で、初めて自分の句が活字となって本に載った時、家族が「お父さんやるね」と褒めてくれ、家族の絆を感じ勇氣づけられたと言っている。だからこそ、家族への愛情には深いものがある。

芹刻む娘の刃音妻に似て

肩瘦せてをりし昼寝の妻ならむ

母の忌や母活けしごと小菊活け

そして、句集名となった大好きな草笛について。

昔ほど鳴らぬ草笛鳴らしけり

◆柏木はる子「ポシエットの猫の口」

老岐坂書房

著者略歴 昭和二十一年茨城県岩井市（現坂東市）生。平成十四年「野火」入会。十九年「野火」同人。俳人協会会員。

文庫本サイズのおしゃれな句集だ。菅野孝夫主宰が巻末で書いておられるが、著者は幼稚園の先生を十二年間も続け、幼い子の相手になってきた人ならではの優しさが全編にあふれている。

切株の温みを去らず冬の蝶

象舎の象りんご食ふ時鎖引く

蟹の目に空の三六〇度

万緑やりユックから出る哺乳瓶

日光を浴びた切株から離れられない冬の蝶、鎖を引きずる動物園の象、蟹の孤独感……。それから、遠足に来た幼児の哺乳瓶。作者の温かな視線が揺れている。

しかし、優しいだけではない。油断していると、どきっとする句も。小さなお腹をギョツと押されて声を上げるキューピー、出目金に着替えを見られた女性の羞恥心。

永き日のキューピー押せば泣きにけり

出目金に着替の肌を見られけり

最後になったが、句集名にある可愛い「猫の口」のタネ明かし。「近くのスーパールのレジで、小学校高学年の女の子が猫の顔の描かれたポシエットを開けようとしていた。その瞬間に出来た句」（あとがき）だそう。なあんだ。

ポシエットの猫の口開く日永かな

水明例会



第一例会（浦和）

茂木 和子
延昭 報

あめ色の母の印かん文化の日
縄のれんの奥に国旗や文化の日
文化低しと合併おぢやん文化の日
文化の日酒にはふかに「棒縛」
ロボットの膝の屈伸文化の日
五歳より文武両道文化の日
棍棒で我を打つてみる秋の冷

光 子
はるみ
理 恵
千 穂
喜 恵
和 葉
光 弥
以上特選
岡野 順 子
チアキ
瑳 蘭
和 葉
治 子
マスミ
大場 順 子

鉄棒の落第坊主秋の暮
ありがたきかな俳句をひねる文化の日
天秤棒を立掛け一服秋日和
うす味の冷めし味噌汁文化の日
文化の日生醤油匂ふ焼むすび
棒押しや運動会は大歓声
新蕎麦粉待ちて麵棒まかり出る
棒もてばチャンバラごっこ懸げ大根
神殿に棒立ち拝む文化の日
文化の日父と上野にゴッホ展
宗教新聞配る細声文化の日

微 平
千 穂
はるみ
延 昭
喜 恵
理 恵

第二例会（東京本所）

太田 絹映 報

団栗や心ころころ宝島
団栗や歩道に一つはみ出でし
団栗をさてこそ森に置き帰る
団栗を小さき「ぐう」より賜りぬ

登志子 昌 弘
竺 仙

第三例会（東京）

五明 昇 報
曲淵 徹 雄

一瞬に水のつながる秋出水
千枚も菊を写して菊花展
露寒や小犬三匹曳く女
異体字の読めず辞書繰る夜半の秋
露寒や奸婦の塚を勞りぬ
露寒し過去捨てきれぬ影法師
松にまで燃え移らむと山紅葉
露寒し消したテレビに映る顔
木酢や里を飾りて山暮るる

祥 絵
清
みどり
康 世
萬 蝶
喜 久
大場 順 子
以上特選
喜 久
理 恵

何回も転ぶどんぐり子の無心

敏 江
以上特選

昨日より多めに研ぎぬ今年米
一部屋に一枝で足る金木犀
ご即位のオーブンカーや秋の空
ぼつぼつとどんぐり地球に着地せり
初しぐれ大川端の常夜灯
どんぐりのバス待つベンチに置かれたり
手に取らば時空を超ゆる櫛の美
団栗や少年この頃無口なる
子等去りてどんぐり土に眠りけり
すずなりの渋柿そと家の陰
どんぐりや谷に沿ひゆく獣道
口遊みつつどんぐり拾ふ母子かな

鶴 城
敏 江
登志子
みどり
絹 映

若松句会（京橋）

菊池ひろこ
石田 慶子 報

大根抜く来てはくれないラガーマン 月を

黄落や昨日と明日を繋ぐ今日

黄落やジバングと化す狭く村

黄落を全身に浴び佳人かな

黄落の静寂極むる神の池

黄落や真つ赤な嘘の共白髪

黄落や海へと「日本大通り」

来し方を黄落最中振り返へる

黄落のファンファーレ御代寿ぐや

黄落に坊主たすきの寺の庭

黄落やゴツホの好きな黄がまはる

黄落のペーブメントや蝶ネクタイ

紅葉且つ散る炎と消えし首里城

黄落やだから坂を亀の歩で

黄落やパントマイムのピエロ跳ね

黄落の舞ひ妨ぐる今朝の雨

芝目よむ彼のゴルフアへ黄落す

記名あるものより湿り黄落期

ひろこ 佐江 月を 慶子 千春 知子 鶴城 はるみ 儀勝 理恵 倭子 萬蝶

——以上特選

☆ ☆

通信指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信指導を実施しています。希望者は、左記により作品を送って下さい。

主宰 山本鬼之介

記

〔指導者〕 境 延昭

〔作品〕 七句 〔受講料〕 千円

〔方法〕 ①用紙自由 ②住所・氏名・

電話番号を明記 ③84円切手同封

④返信用封筒は不要 ⑤締切は随時

〔送付先〕 境 延昭

〒三三七―〇〇四―さいたま市

見沼区南中丸一―一―四一

電話 〇四八―六八六―二二八―

水明発行所受付時間

曜日：(月・水・金)

時間：午後1時から午後5時

(火・木・土・日・祭日は休み)

(上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内をお願いします。)

各地句会

花ごよみ句会 (浦和)

空青く山は色づき神の留守

つり糸のたるるまはりをつがひ鴨

「ハヤブサ」は地球を目指す神の留守

りそな俳句会 (浦和)

誇らしく散り山茶花の古屋敷

うち枯れし猷花の束に小夜時雨

時雨るるや三味をかかへる太鼓持ち

山茶花や尼寺五山訪ふ旅路

片時雨山の端にある夕茜

山茶花の宿に癒やしを求め来て

時雨るるや大台ヶ原に孤狼吠え

山茶花咲き残るはカレンダー二枚

村時雨昼を灯すや山の宿

柿の木塾 (浦和)

霊木の柵に鳩居る神の留守

神州突く大暴風雨神の留守
防犯カメラ作動中なり神の留守
忘るるも忘らるるもよし返り花

存分に産土歩く神の留守

席譲る人も老人神の留守

津波のうねりまだ耳底に返り花

村はづれの大樹の脇に帰り花

かみさんと時を同じく神の留守

生垣の中の一灯返り花

芙蓉句会 (浦和)

ウインドに写る吾が身や濡れ落葉

落葉掃き朝のコーヒー満喫す

どの道を行つても出会ふ紅葉狩

落葉して風姿なまめく柳かな

身はやめど心たしかや落葉雨

悔しさを靴底に込め落葉踏む

はこべ句会 (浦和)

冬芽びつしり何も願はぬ手を合はす

マスクしておほかた隠す氏素姓

マスクして薄墨で書く忌の知らせ

陣を解く末広がり鴨の水脈

顔見世や松緑の奴板に付き

テンプルに貌のままなるマスクあり

あの山と定めて落暉冬初め

光が丘俳句教室 (東京)

光弥

かつ子

昇

和葉

清

水尾

恵子

俊晴

和子

正子

道子

税子

仁子

知加

美子

ざく子

美代子

愛子

光子

ひさの

敦子

千穂

光が丘俳句教室 (東京)
時雨去り角のうどん屋がらんとす

葉隠れに侘助の花五つ六つ

勤行に異国の人も朝時雨

水仙の葉の先ツンと空へ向く

クレーン伸ぶ工事現場の冬青空

侘助や今日の干菓子は小判形

蝌蚪の会 (浦和)

冬木立陽のさす方の空青し

蜜柑山切り拓いてや温泉宿

紅葉散る常滑焼の土管坂

万両の実たわわなり母の庭

友の有り困炉裏の酒に夜を混ぜて

手を繋ぐ母子の背中石路の花

山茶花 (浦和)

ひき売の焼芋の笛風にのり

両の手に焼芋ほつこりフウフウ

戸を閉つる音の乾きや冬近し

晴続きこれで一先づ冬隣

体操の参加者減りて冬隣

焼芋やスパー出口に香でさそひ

蔓草をたたんで広し冬隣

ひつそりと銀座の角に焼芋屋

守伊

はる

康子

史子

野人

理恵

るみ子

元美

宣子

さち子

鶴城

月を

しず子

泰子

マシミ

嶺一

清一

美江子

光子

綾子

皇月の会 (浦和)

帰り花米寿の叔母のハイヒール
冬めくや薄はんやりの草木かな
優勝の謝意を告げあふ冬日和
父母の感謝の祈り千歳飴
暈なはる山の奥より初時雨
参道は木の葉しぐれに隠れけり
立冬や氷川参道風の道

けやきの会 (東京)

真青なる秋天渡る歩道橋
凭れ合ふ倒木叩く颯風囀
生み出す句一会でありし吾亦紅

あゆみの会 (浦和)

丸窓の障子も欲しき枯山水
休み処の障子に映る影ふたつ
障子越し影絵の犬にパパの声
白障子横座の兄と酌む地酒
横着のコンビニおでん二人分
立冬の午後の陽浴びて散髪に

大宮読売俳句教室 (大宮)

小春日や朝から児らの声弾む
かうしては居れぬ小春や庭仕事

静香 孝磨 カズ子 久子 節子 曆文 さいち
由美 祥絵 康世
山遊 圭子 朋子 重子 藻好
典子 君夫

離れ鴨入日について背を向け
鴨鳴くや郷関出でて五十年
荒れ川に鴨も家居を失へり
跳ね橋や鴨の集まる運河べり
三角や六羽寄り来て鴨の陣
熊本城の天守聳ゆる小春空
寄り添へば水輪重なる葦辺の鴨
分ち合ふ小春の神橋親子連れ
小春日や達者で暮らせと母の文
小春日の縁側の猫大欠伸
鴨の陣筑波風にちりぢりに

桜林句会 (大宮)

神の留守火防の札を貼り直す
神の留守ひと日の無事を甘納豆
神の留守牛舎に遊ぶ雀たち
巫女の掃く帚目確か神の留守

水明熊谷句会 (熊谷)

小町針そのままにして暮早し
納屋の戸を閉め短日の作業帽
短日の時を指をり鳩時計
暮早し友とおしやべりとめどなく
大家族すき焼の肉数を決め
すき焼や小さき頭ものり出せり
町長も白浪力演日短し
鋤焼を独り楽しむ館かな

徹雄 正信 卓郎 サヨ子 弘夫 利子 紀子 治子 寛治 翔太 順子
光恵 知子 美佐尾
秀子 燈女 徹平 裕子 栄子 藤十郎 正行

小さき灯を連ねし御堂暮早し
短日や伐られて松の男前
鶴川山百合句会 (鶴川)
せんべい一枚かじつて秋の日の終る
稲子跳ぶ千枚田への細き道
蝗捕り父の繕ふ草袋
刈急ぐ先へ先へと飛ぶ蝗
開智学校蝗まぎれてゐたりけり
平板な日々木屋の咲いて散る
いなご捕り名人は分家のいかず後家
蝗捕り従兄の後を追ふばかり
淡淡と祖母は蝗を煮てをりぬ
金秋や名画一枚たどる旅
歓声も悲鳴も子等の蝗捕り
里のばあの栃餅あんのたつぷりと
きざきサークル (浦和)
そこまでが少し先まで小春日の日
焼鳥をみやげに亭主千鳥足
横丁の路地に焼鳥目がしみる
打上げの背を押されおて焼鳥屋
小春日のバンドネオンに魅せられて
焼鳥や来年のこと鬼笑ふ
久し振りに会へば乾杯焼鳥屋
焼鳥屋スマホで会話席を待つ
焼鳥屋の店主こだはる備長炭

治江 茂子
八洲男 雄二郎 月を 喜久 史代 広子 知子 由美子 千春 萬蝶 理恵 玲子
俱子 啓子 雅代 かつ子 タイ 喜代子 千種 和枝 和子

櫻蔭句会 (浦和)

寒禽の一羽づつ来る小さき庭

水漬きし森に寒禽声絞る

大群に将のあるらし冬の鳥

確かなる水脈平行の冬の鳥

るざり機響く里村小六月

小春日や五年日記の今日この日

青梅宿今日も小春の晴れ女

朝焼けの蘇鉄の峰冬の鳥

山霊と遊ぶ高音か冬の鳥

芽吹句会 (浦和)

枯並木ゼブラ模様に夕日影

縁側に光りのつぶて蒲団干す

魁へる力を残し枯木立

鳥たちの集まる枯木影絵めく

潮の香の入りこむ朝の布団部屋

満身の力を込めて布団干

枯木星首まで浸かる露天の湯

野ばらの会 (浦和)

誘はれてひたすら優し紅葉川

蕎麦搔くを教へる夫は山育ち

百余段踏み場もなきに散り紅葉

由紀子

美紗子

公子

真理

茂子

幸代

美智枝

美子

マスマ

朝子

玲子

千重子

富子

ひろこ

チアキ

徹

治江

夏江

和子

百畳の伽藍の床に映ゆ紅葉

湯の宿やからんころんと夕紅葉

蕎麦搔や爺の楽しむ手酌酒

雲流れ山の紅葉に影うつす

青葉の会 (浦和)

野舞台で琴の合奏文化の日

冬草や柵に干さるる飼葉桶

畑隅みの根のたくましき冬の草

冬草を分けてくんたんお礼肥

満月に消えし天文オリオン座

冬草や雨戸の外に気配せり

コクーンシティカルチャー俳句教室(さいたま新都心)

ゐのこづち餓鬼大将に秘密基地

ゐのこづちつけて少年凱旋す

へそ曲がりそれとも律儀帰り花

初冬や佐渡から届く合せ味噌

ゐのこづち空き地に猫の三毛と黒

新割りの音牙え渡り冬支度

初冬や雲の間に間に半月も

初しぐれ濡らすに惜しき蛇の目傘

かわせみ句会 (浦和)

秩父路の生な椎茸とりにつけり

秀子

茂子

栄子

みき子

美子

啓子

公子

洋子

和子

輝翠

延昭

俱子

俊晴

正信

美枝子

佳代子

淑子

昇

敏子

霜月の晚鐘ひとつ響きけり

舞茸やアメリカ牛の柔きかな

霜月や熱き濃茶とカステラと

霜月やパン工房の匂ひ立つ

繰り返す災禍の痛み霜月は

淡墨の書展に惹かれ霜降月

松茸を三和土一杯広げしこと

大合唱霜月の空へ響き合ふ

たかな俳句会 (川口)

豆力士集ふ境内神無月

いつよりか疎縁となりて神無月

安さんは輪祭の土産下げ

相槌と意気合ふ火花鍛冶祭

美人画の髪ほつれや神無月

玄関を掃き清めては神無月

花衣の会 (浦和)

柿の荷の男結びにある矜持

陽明門拜みし後に利酒す

新走りひしほ少少あればよし

今年酒注いでこぼれて掌にほのか

下戸なれど新酒一杯頂戴す

神殿に杉の香匂ふ今年酒

神主の木沓かるやか秋祭

智子

順子

良枝

信子

保子

友子

治郎

育子

義子

鶴城

真知子

水尾

静香

妃実子

みよ

京子

みち

峯雄

治

眞臣

章嘉

新樹の会 (浦和)

腕を組み瞑目すれば木の葉雨

冬の浜夜行列車の窓を拭く

立冬の朝日まぶしき露天の湯

一葉忌質屋の戸口半開き

山茶花の花弁拾ふ行き帰り

下町の路地から路地へ一葉忌

まだ色を残す徒花冬に入る

木の葉散る上野の森にゴッホ来る

日のやさし木の葉降り積む光堂

円卓の会 (浦和)

顔見世や客待つまねき文字のはね

科多く生き来て今や山眠る

顔見世や東男に京女

道具持つヒト科のヒトや牡蠣を剥く

顔見世やだいこごんぼう赤かぶら

顔見世や座りの悪い付けまつげ

若狭水明会 (若狭)

冬めくやグラタン焦がす色に昏れ

冬めくや縄一把の使ひ道

水仙や上皇后さま薫りたつ

熊の出るニュースにも馴れ野水仙

断崖の上ともしらず野水仙
冬めきて無口になりぬ田や畑
風の首庭の葉擦れの冬めける
灯と経ともるる御堂や朝寒し
冬めくや列車遅延のアナウンス
集会のゆくへ舵取る水仙花
正装になれば寡黙や白水仙

鶴城

清吉

宣子

平通

京子

韶子

紅花

徹

でん治

千穂

徹

千穂

翔太

瑤蘭

月を

鶴城

初花

和風

白鷺

冬至

保人

鼓

郁子

寛久

ことは

祥子

想子

和子

道子

千枝子

千世子

満耶子

さわゑ

美恵子

洋子

迪代

ゆら女

洋子

ヒサ子

一木

智恵子

卓也

電線の遊びのたるみ小春風
庭菊の添へ木の竹も傾きたる
キリストの鎖骨の凹み秋桜

神戸大池句会 (神戸)

移情閣潮騒音なに石路の花
異文化の歴史に触れて冬うらら
舞子浜空は千鳥のプロムナード
松籟や同じ年逝く冬初め

水明鬼石句会 (鬼石)

好物は後で食べる派冬うらら
秋の虹十二単の皇女たち
風邪ごち土鍋ことごとことごとと
風遊ぶ父のふる里つるし柿

ミモザの会 (横浜)

恐るべし新米と言ふ塩むすび
小春日の高層ビルのガラス拭き
この星は怒つてゐるや落葉掃く
冬空を吸ひ込みて胸青くなる
秋の鬱ただ外に出て深呼吸
冬ぬくし退院の姉思ひつつ
「祝賀御列の儀」に酔ふ菊日和
陸亀の靴はくことも小春かな
黄落の木洩れ日纏ひベビーカー

和子

聡子

紀子

ナオ子

慶子

萬蝶

亜弥子

由美子

栄子

史代

知子

玲子

千春

野 菊 の 会 (与野)

霜月の石の素肌に脈ありや
山路来て美男葛のなほ赤し
手短に手水を終へし神無月
さねかづら夕日爛熟して墜ちる

珊 瑚 の 会 (浦和)

焚火して焙らるる人の裏表
暮早し塾明明と灯りたり
知らぬ人と今日の予定を朝焚火
夜叉となり仏となりて焚火かな
暮早し買物籠に頭痛薬
暮早し訃報回覧小走りに
磯焚火波をも焦がす火の粉かな
人知れず焚火に焼べる文の束
夜焚火やどんだん闇の攻めてくる
余生とて燃ゆる物欲し焚火の火
断捨離は一日仕事暮早し
四時に鳴る下校のチャイム暮早し

雛 の 会 (浦和)

蕪洗ふ白さが透ける出荷前
加賀よりの到来物の蕪鮓
北風や人遠ざける旧街道
北風やみ空の雲をかたづけ

和子
清子
光子
美代子

燈女
佐江
喜恵
チアキ

北風やもみじマークの対向車
被害なき集落北風吹き抜ける
蕪汁ホームの朝を包み込む
北風やフルートの音途切れとぎれ
水明松本句会 (松本)

瑳蘭
むら子
輝翠
かつ子

冬ざるる門灯暗き館かな
冬ざれや薄墨色に街暮るる
冬ざるる家路を急かす夕茜
冬ざるる彫りの寂びたる道祖神
枯蟪蛄鎌あぐ影の大地かな

富子
彰二
千重子
萬二郎
治子

和子
広子
和葉
かつ子
喜恵

雲の峰映して里の小川かな
タイミンク逃し慌てる衣替へ
山茶花にベビーピントクのアクセント
お車に輝くティアラ白薔薇
小川句会 (小川)

恒子
陽子
マリ子
玲子
寿子

世話は鈍色羽織村まつり
紅顔の男の子が鬻る冬林檎
羽のごと袂を広げ七五三
漆黒の闇を動かす鯛起し
急坂にバスつんのめる紅葉狩
異次元をかもし濃霧や火の点描
ねんねこの深きところに頬つべかな
冬ざくら坂道多き浦和宿

かつ子
倭子
水尾
佐江
義子
慶子
ます美

マスミ
水尾
昇
恵子
光子
史代
節代

笠山の特に際立つ冬日和
頑張ると言ひつつ散るも桐一葉
天界も多分冬晴れコーヒー呑む
冬晴や登校拒否の子も外に
メモ用紙書いて出かけるみかん狩
折紙に山あり谷あり長き夜
障子越し入り陽のぬくし寒日和
冬晴や早くも吟子栄一像

むら子
さよ子
和子
武
みや
栄子
綾子
藤十郎

襟巻の浅葱の裏地銀座の灯
群青の海になだるる野水仙
小春日や筒音しのび田原坂
長い坂上りされぬも帰り花
はたらいて冬夕焼に包まるる

美佐尾
延昭
翔太
徹平
忠男
順子

櫛 の 会 (浦和)

枯蟪蛄眼をぎよろつかすベンチの背
冬ざれや名も無き村のおとむらひ
定まらぬ威嚇のポーズ枯蟪蛄

裕之
克之
朋子

瀬祭

十二月号

受贈句集紹介

鈴木多津子

「道草」五明 昇(ごみよつ のぼる)

昭和十九年 長野市生れ

平成二十一年「水明」入会

平成二十二年「水明」同人

「鳥羽谷」入会

五明昇氏は、長野市に生まれ信州大学文理学部(現経法学部)を卒業し、日本経済新聞東京本社編集局に入社し、平成二十年同社客員となった。

埼玉県に居を構え、埼玉県俳句連盟事務局幹事、さいたま文藝家協会会員、埼玉県俳句連盟事務局次長等の要職を務めている。

また平成二十九年から埼玉県俳句連盟運営委員にも就任されている。

五明氏は社会人生活を卒業後俳句を志した。生来旅が好きで、折に触れて国内外の風物を見聞きしてきた。

真つ直ぐに上り詰める人生もいいが、その時々々の森羅万象

に気をとられながらゆっくり歩む人生も捨てがたいものであり、この道草こそが人生を豊かで実り多いものとしてくれる糧であることに気づかされたあとがきに書いている。

一句一句どれも「今を詠む」の手法のようであり読者を感じさせる新鮮さと円熟した作品である。

気になった俳句を採り上げてみます。

朝掘りの雫が売りのたけのこ屋
天と地を捨身で繋ぐ滝の水
公魚もアルプスも釣る山の湖
左義長に紛れて焚きぬ文の束
春雲のひとつとなりて飛行船
山晴れて全席自由の大花野
道草は旅のはじまり筆の花
税務署に納めて帰る春の泥
活断層起こさぬやうに野蒜掘る
木枯も過客のひとり大樺
探梅を足湯に癒す伊豆の旅

新春俳句大会のお知らせ

- [日 時] 令和2年1月30日(木)
午前10時受付 11時投句締切 12時開会
- [会 場] さいたま市民会館うらわ 1階101集会室
さいたま市浦和区仲町2-10-22 TEL 048-822-7101
JR浦和駅西口より徒歩10分 浦和ロイヤルパインズホテルの裏
- [投 句] 2句 初のつく新年の季語・当季雑詠(雑詠二句は不可)
- [会 費] 5,000円(昼食・お茶・懇親会費を含む)
句会のみ2,000円(昼食・お茶を含む)
- [懇親会] 句会終了後、同じ101集会室に於いて開催。午後5時終宴予定。
- [申 込] 参加費を添えて、1月15日までに、発行所総務部まで。

第一例会・行事部

水明忌のご案内

- 日 時 令和2年2月23日(日)
午前10時受付 11時投句締切 12時開会
- 会 場 さいたま市民会館うらわ1F 101集会室
さいたま市浦和区仲町2-10-22 電話048-822-7101
- 投 句 2句 梅一切、当季雑詠(梅二句可、雑詠二句は不可)
- 会 費 5,000円(昼食・お茶・懇親会費を含む)
2,000円(句会のみ)(昼食・お茶を含む)
- 懇親会 句会終了後、同会場にて開催、5時終宴予定
- 申 込 参加費を添えて2月17日迄発行所総務部まで

行事部

水明創刊 90 周年 記念祝賀会・全国大会のご案内

■記念全国大会

日 時 令和 2 年 6 月 29 日 (月)
受付開始 9 時 30 分 開会 10 時 閉会 15 時 30 分
会 場 ロイヤルパインズホテル浦和
4 階「ロイヤルプリンセス A・B」
〒 330-0062 さいたま市浦和区仲町 2- 5- 1 ☎ 048-827-1111
行 事 水明賞・季音賞・かな女賞・新珠賞の授賞、記念特別作品
の授賞、新誌友紹介者の表彰、新季音同人、新同人の紹介、
兼題入選句の発表・受賞・講評など

■記念祝賀会

日 時 令和 2 年 6 月 29 日 (月)
受付開始 15 時 30 分 開会 16 時 閉会 19 時
会 場 ロイヤルパインズホテル浦和
4 階「ロイヤルクラウン A」(住所、☎は全国大会と同じ)
行 事 来賓挨拶、俳壇著名人のビデオメッセージ、大福引大会など

■参加費 (5 年前の水明 85 周年記念祝賀会・全国大会と同額)

記念全国大会・祝賀会 25,000 円
記念全国大会のみ 8,000 円
記念祝賀会のみ 20,000 円

■宿泊斡旋

宿 泊 日 令和 2 年 6 月 28 日 (日) および 29 日 (月)
宿 泊 先 ロイヤルパインズホテル浦和
宿 泊 費 シングル 11,500 円 ツイン 10,500 円 × 2 = 21,000 円
*ともに朝食・消費税・サービス料込み
*料金は令和元年 7 月現在のものです、今後変更の可能性あり
*支払いはチェックイン時にホテルへ直接お願いします

■申込み・締切 未定 (追って詳細をお知らせします)

◎減多に無い貴重な機会です。ベテランはもとより、新入会員の方々も
お誘い合わせて多数ご参加下さい。みんなの力で祝賀会・大会を盛り
上げましょう。

水明創刊 90 周年記念事業 実行委員長

水明創刊 90 周年 記念特別作品募集

記念祝賀会・記念全国大会のご案内の通り、水明創刊 90 周年を記念して、下記の要領で俳句・エッセイ、評論の各部門の特別作品を募集いたします。

選考委員以外はどなたでも応募できますので、奮ってご投稿下さい。なお、受賞者の表彰は 6 月 29 日の記念全国大会で行います。

応 募 要 領

【応募資格】 選考委員を除く全ての水明会員。

【応募部門】 ①俳句作品：30 句（400 字詰原稿用紙を使用）

②エッセイ：1 篇（400 字詰原稿用紙 6 枚程度）

③評 論：1 篇（400 字詰原稿用紙 12 枚程度）

◆原稿用紙は各部門ともに、タテ書き用 B 4 判 400 字詰を使うこと。

◆文字は、選考委員が容易に判読できるよう楷書で丁寧に書くこと。ワープロやパソコン入力による原稿も可。

◆いずれも未発表作品に限る。（水明誌および外部に発表した作品は不可）

◆最初のページの 1 行目に表題（タイトル）を書き、その下に姓名（俳号）を書く。

◆複数部門への応募も可。

【応募締切】 令和 2 年 3 月 31 日

【作品送付先】 〒 339-0067 さいたま市岩槻区西町 5 - 6 - 38

山中順子 宛 *「記念特別作品」と朱書する。

【選考委員】 主宰・山中順子・星野和葉・境延昭・五明昇・網野月を

◆選考委員各自の選考結果を基に厳正に協議し、授賞者を決定します。

【授 賞】 俳句・エッセイ・評論それぞれの部門に授賞します。

正賞：各部門とも賞状と副賞 5 万円

準賞：各部門とも賞状と副賞 2 万円

◎ご質問・お問い合わせ

実行委員長 山中順子 (☎ 048-756-1253) へお願いします。

水明創刊 90 周年記念事業 実行委員長

令和2年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の主旨をよく解されて多数のご応募をお待ちしています。

応募資格	季音同人を除く同人・誌友
応募句	未発表作品：15句（表題を付す） 水明集・句会報等「水明」誌及び外部に発表した作品は不可。
締切	令和2年2月末日（発行所必着）
応募方法	水明12月号に応募用紙添付

選考は、新珠賞推選委員による推選結果を参考に、新珠賞選考委員会に於て受賞者を決定いたします。

尚、誌上には受賞者の作品のみを発表します。

新珠賞選考委員会委員（7名）

山本鬼之介 山中 順子 星野 和葉
茂木 和子 境 延昭 五明 昇
網野 月を

新珠賞推選委員（6名）

宇田 白鷺 大橋 勉代 大村 節代
小林萬二郎 椎野美代子 波多野寿子

風 声

○俳句四季十一月号―「花の歳時記」欄に「桔梗」の題で山本鬼之介主宰のエッセーと水明会員三十名の桔梗の句。

桔梗に時を忘るる古都の昼

鬼之介

「季語を詠む・露凝る」欄

露凝るやお手植ゑの松二百年

鬼之介

○現代俳句十一月号―「新入会員記念作品」欄

桜花舞ひ夢はちきれむ袴の娘

杉浦理恵

来し方を笑ひ飛ばして花見酒

「『現代俳句年鑑二〇一九』を読む」欄、いわきり秋月選

捨てられぬものに臍の緒さくら貝

松井由紀子

同、森本弥生選感銘十句抄

座右の銘は「独立独歩」雲の峰

鬼之介

同、石原道明選感銘十句抄

賓頭盧の光らぬ部分秋深し

鬼之介

同、柳本ゆみ選感銘十句抄

横綱の土俵入りかな秋の山

吉住光彌

「現代俳句の風」欄

海の日の流木にある力かな

岡野順子

秋めくや土偶の腰のまどかなり

田中千穂

萩乱れいよいよ狭し寺の道

大塚茂子

坂下る吾より木の実早きかな

川島典虎

○くちら（中尾公彦主宰）十一月号―「受贈誌美術館」欄

誰がための拳手の礼かな秋の海

鬼之介

○好日（高橋健文主宰）十一月号―「受贈誌御礼」欄

萬緑の森に居さうな迷ひ神

鬼之介

○罇（山本一步主宰）十一月号―「受贈誌の一句」欄

百合の香に眠れば夢に母が来る

十倉和子

○新月（松田碧霞主宰）十月号―「受贈誌紹介」欄

瑞兆の五代の空よ水明忌

鬼之介

○雪嶺（石本雪鬼主宰）十・十一・十二月号―「受贈誌よ

り」欄

さまよへる「大和」の主砲おぼろ月

鬼之介

新能われは心の足はこび

○天穹（屋内修一主宰）十一月号―「主宰句紹介」欄

雨降らす夏天の龍の力業

鬼之介

○鳩の子（柴田多鶴子主宰）十・十一月号―「受贈誌御

礼」欄

思ひかよへば鈴蘭の鈴鳴ることも

鬼之介

水明発展基金御礼 (敬称略)

—十一月三十日現在—

内田 恵子	10	口	野平美紗子	5	口
岡野 順子	10	口	秋山 冷子	10	口
山下ユリ子	3	口	島津 初花	5	口
笹本 啓子	3	口	池田 雅夫	10	口
大塚 茂子	6	口	波多野寿子	10	口
村杉 清吉	2	口	—合計—	74	口—

水明発展基金募集のお願い

○一口千円 何口でも何回でも何時でも。

○振込口座番号 0013005145024

○領収証は発行せず、その都度「水明」誌上に掲載してお礼に代えます。

水明俳句会・水明発展基金

II 水明掲示板 II

◆さいたま市浦和俳句連盟秋季文化祭俳句大会

兼題の部

8位 松本 光子 12位 五明 昇

18位 大村 節代 27位 星野 和葉

席題の部

埼玉県知事賞 (1位) 山田美佐尾

埼玉県俳句連盟会長賞 (4位) 五明 昇

12位 大場 順子 21位 熊倉千重子

27位 星野 和葉

◆埼玉県俳句連盟文化祭俳句大会

兼題の部

埼玉県俳句連盟会長賞 (9位) 大村 節代

11位 大塚 茂子

水明の運営組織 (令和2年1月1日現在)

主 宰 山本鬼之介

運営幹事長 山中 順子

編集長 星野 和葉

常任運営幹事 茂木 和子 大村 節代 境 延昭 五明 昇

網野 月を 日高 徹 石山かつ子 青木 鶴城

保坂 翔太

運営幹事 小林萬二郎 椎野美代子 宇田 白鷺 大橋 廻代

各 部 (○印は部長)

総務部 (総務に関する企画・立案、会計、庶務、水明の発送等)

○茂木 和子 日高 徹 石井 喜恵

編集部 (水明編集の企画・立案・校正、水明の発送等)

○星野 和葉 大村 節代 丸山マスマミ 大塚 茂子

行事部 (全国大会等主要行事の企画・立案・運営)

○山中 順子 石山かつ子 福田藤十郎 内田 恵子

松本 光子

普及推進部 (地方との連携、新誌友拡充の企画・立案・運営・実行、広報活動)

○網野 月を 青木 鶴城 小林萬二郎

研修部 (会員の研修、夏行、水明塾の企画・立案・運営・実行)

○境 延昭 太田 絹映 保坂 翔太

事務局 (水明運営の企画・立案、運営幹事会の事務局、名簿・会員移動管理)

○五明 昇 井口 俊晴

監 事 (水明の会計監査)

町野 広子 山中みどり

水明発展基金役員

会 長 山本鬼之介

幹 事 山中 順子 茂木 和子 星野 和葉 五明 昇

日高 徹

監 事 町野 広子 山中みどり

令和2年主要年間行事等予定表

令和2年1月1日

行事名	日程	誌上ご案内	開催場所等	主担当	支援
水明新春俳句大会	1月30日(木) 10時	12月・1月号	市民会館うらわ101号	第一例会	行 事 部
水 明 忌	2月23日(日) 10時	1月・2月号	市民会館うらわ101号	行 事 部	
春の吟行会	3月31日(火)	1月・2月・3月号	本所・ビッグシップ	第二例会	行 事 部
90周年記念全国大会	6月29日(月) 10時	4月・5月・6月号	ロイヤルパインズホテル浦和	行 事 部	
90周年記念祝賀会	6月29日(月) 16時	4月・5月・6月号	ロイヤルパインズホテル浦和	行 事 部	
水明夏行	7月29日(水) ～31日(金)	6月・7月号	浦和パルコ10F	研 修 部	行 事 部
りんどう忌	9月26日(土)	7月・8月9月号	未 定	行 事 部	
水 明 塾	10月27日(火)	8月・9月10月号	浦和パルコ10階 (詳細未定)	研 修 部	行 事 部

(注) 予定表の詳細未定については、月日・場所等が変ることもあります。
 本行事予定表にない日帰り吟行会、吟行旅行等については個別に対応。
 ※「水明忌」は如月忌、紗一忌、光二忌を統合した新忌日。

水明例会および各地句会・教室のご案内

(令和2年1月1日)

句会名	日時	場所	指導・代表	幹事・連絡先 (自宅電話番号等)
第一例会	第1日曜 13時	浦和コミセン (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木 和子 048-886-1860 境 延昭 048-686-2281
第二例会	第3金曜 13時	本所ビッグシップ (東京・本所)	網野 月を	太田 絹映 03-3819-6730
第三例会	第1月曜 13時	大久保ルノアール (東京・新宿)	山本鬼之介	五明 昇 048-858-7155 曲淵 徹雄 048-864-4018
第四例会	第1木曜 13時	浦和コミセン (パルコ・10F)	椎野美代子	境 延昭 048-686-2281 石井 喜恵 048-683-0801
第五例会	第3火曜 13時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤 佐江 0480-22-4011 河野はるみ 090-9008-6422
関西例会	第3日曜 13時	守口文化(セ) (大阪・守口)	大橋 勉代	森本 早苗 078-583-6225
婦人句会	第3月曜 13時	水明発行所	山中 順子	西山貴美子 048-881-2750
若松句会	第1土曜 13時	京橋区民館 (東京・京橋)	山本鬼之介	菊池ひろこ 03-3999-5827 石田 慶子 03-3853-2048
水明鬼石句会	第3水曜 13時30分	藤岡市鬼石公民館 (群馬・鬼石)	野口 和子	野口 和子 0274-52-3418
水明小川 俳句に親しむ会	第2金曜 13時	大塚コミュニティ (セ)(埼玉・小川)	森 千代子	加藤むら子 0493-72-0012
水明熊谷句会	第4火曜 13時	熊谷市立 コミュニティセンター	山中 順子	大塚 茂子 048-596-1538 越田 栄子 048-525-5835
雑の会	第2木曜 13時	水明発行所	山中 順子	石山かつ子 048-757-2484
櫻蔭句会	第3金曜 13時30分	浦和コミセン (パルコ・10F)	山中 順子	丸山マズミ 048-886-2447
桜林句会	第1金曜 13時	大宮生涯学習(セ) (さいたま・大宮)	椎野美代子	山田美佐尾 048-861-3968
野菊の会	第2水曜 13時	下落合公民館 (さいたま・中央)	椎野美代子	茂木 和子 048-886-1860

句会名	日時	場所	指導・代表	幹事・連絡先 (自宅電話番号等)
芽吹句会	第3金曜 13時30分	浦和コミセン (パルコ・10F)	山本鬼之介	日高 徹 048-886-8173
柿の木塾	第3金曜 13時	水明発行所	勉強会	茂木 和子 048-886-1860
歩の会	第1金曜 12時	水明発行所	勉強会	茂木 和子 048-886-1860
りそな俳句会	第2火曜 18時	浦和コミセン (パルコ・10F)	星野 和葉	高島 寛治 048-782-8809
山茶花	第1水曜 10時	本太公民館 (さいたま・浦和)	星野 和葉	宮下 嶺一 048-882-7593
はこべ句会	第4土曜 13時	水明発行所	勉強会	田中 千穂 03-3824-3991
櫟の会	第3水曜 13時	常盤公民館 (さいたま・浦和)	星野 和葉	小林萬二郎 048-882-0450 柚木 治子 048-831-6158
珊瑚の会	第4木曜 13時	水明発行所	山中 順子	大村 節代 048-862-9658
芙蓉句会	第2金曜 9時30分	六辻公民館 (さいたま・南)	山本鬼之介	山戸 美子 048-677-8775
かわせみ句会	第2火曜 13時30分	南浦和公民館 (さいたま・南)	西山貴美子	福田 育子 048-882-1045
花衣の会	第3水曜 13時	土合公民館 (さいたま・桜)	大村 節代	田中 章嘉 048-862-5936
たかな俳句会	第3木曜 13時	芝2丁目集会所 (埼玉・川口)	山本鬼之介	野田 静香 048-261-1858
きざきサークル	第3木曜 14時	木崎自治会館 (さいたま・浦和)	松本 光子	森 和子 048-832-6565
ひまわり句会	第1木曜 13時	草加アコスビル (埼玉・草加)	勉強会	小倉 倭子 048-925-8080 石田 慶子 03-3853-2048
花ごよみ句会	第3月曜 13時	常盤公民館 (さいたま・浦和)	星野 和葉	山下ユリ子 048-861-6685
野ばらの会	第2水曜 14時	さいたま市民活動 サポートセンター (パルコ・9F)	星野 和葉	緒方みき子 048-881-8643
皐月の会	第2・4金曜 13時	浦和コミセン (パルコ・10F)	山本鬼之介	渋谷きいち 048-832-5319
青葉の会	第3月曜 13時	浦和コミセン (パルコ・10F)	山本鬼之介	梅澤 輝翠 090-9825-3415

句会名	日時	場所	指導・代表	幹事・連絡先 (自宅電話番号等)
新樹の会	第4月曜 13時	浦和コミセン (パルコ・10F)	山本鬼之介	加藤でん治 048-855-6744
けやきの会	第2月曜 13時	社会福祉会館 (東京・中野)	勉強会	鈴木 康世 080-5089-4052
鶴川山百合句会	第4火曜 13時	玉川学園文化(セ) (東京・町田)	町野広子	鈴木 玲子 044-952-3643
ミモザの会	第2火曜 13時	アートフォーラム あざみ野(横浜)	勉強会	福田 千春 045-901-6032
水明松本句会	第4週末	波多野寿子宅 (長野・松本)	波多野寿子	波多野寿子 0263-47-8937
若狭水明会	毎月20日	鳥羽公民館 (福井・若狭)	宇田 白鷺	鳥羽 和風 0770-64-1211 鳥津 初花 0770-64-1626
水明大阪俳句会	第2土曜 13時	守口文化(セ) (大阪・守口)	伊藤 敦子	伊藤 敦子 06-6996-7160
和歌山水明句会	第2木曜 13時	太田自治会館	大橋 迪代	大橋 迪代 073-471-5582 西浦千枝子 073-471-7929
神戸大池句会	第2火曜 13時	神戸市勤労会館 (神戸・中央)	勉強会	田寺 玲子 078-914-0341 森本 早苗 078-583-6225
光が丘俳句会	第3火曜 13時	光が丘区民(セ) (東京・練馬)	勉強会	石川 理恵 03-3938-0208 水落 守伊 03-3970-2723
読売カルチャー 大宮教室	第2・4水曜 13時	読売日本テレビ文化 (セ)(大宮)	山中 順子	高島 寛治 048-685-2811 大場 順子 048-647-5157
俳句の手ほどき 岩槻教室	第1・3水曜 13時	岩槻駅東口 コミセン	山本鬼之介	山中 順子 048-756-1253 石山かつ子 048-757-2484
コクーンシティ カルチャー 俳句教室	第2・4金曜 13時30分	コクーンシティ カルチャー (さいたま新都心)	境 延昭	五明 昇 048-858-7155 井口 俊晴 048-824-2024
あゆみの会	第2・4木曜 13時30分	楷風亭 (北浦和公園内)	境 延昭	鈴木 藻好 048-825-0158
蛸蚪の会	第3金曜 9時	さいたま市民活動 サポートセンター (パルコ・9F)	網野 月を	青木 鶴城 048-829-2776
円卓の会	第4金曜 13時	さいたま市民活動 サポートセンター (パルコ・9F)	網野 月を	青木 鶴城 048-829-2776

後記

明けましておめでとう

（和子）

今年水明創刊90周年のお祝の年です。そしてオリンピックが東京で開催されます。その為に七月の全国大会を前倒して六月二十九日に繰り上げました。

今年行事も変更されているので水明誌の案内を確かめ、一人でも多くの方の参加を期待しています。

そんな訳で今年の前期は大変忙しい事になると思います。私事ではありますが、昨秋より体調を崩して沢山の友達にご迷惑をかけましたが、今は何とか少しづつ戻って来たので90周年には健康に注意してみんなで成功させたいと思います。

それから今年は静かな地球ではない。昨年のような台風被害のないよう祈りたい。昨年四月末にご退位なされた上皇さまも次世代に無事にバトンタッチして安堵なされた事でしょう。水明もそ

ろそろのような気がします。

（順子）

最近友人より湯婆を頂いた。昔の陶製・金属製のと違い現代風ポリエチレン製のもの、昔と同じ様に波型がしっかりとついている。湯婆など一度も使った事がなかったのだが、今回どんなものかとしてみる気になった。と云うのも最近足の冷えを感じる様になったからだ。これも年齢のせいかと簡単に考えて気にも止めていなかった。

湯婆の取扱説明書によると低温やけどを防ぐために「布団が暖まったら湯婆は布団から取り出して就寝して下さい」と。昔は暖まると勝手に蹴飛ばしていたと聞いた。そんな事を思い出し乍ら始めての湯婆使用、結果は上上。じわじわと足から伝わってくる温み。何かに包まれていく様なぬくぬく感。お陰様で足の冷え感は無くなった。友人に感謝。ふっと思った。従来の季語集の中にも使用しなくなった物もあろうが、今だからこそ逆に面白く活かされるものもあるのではと。時代遅れの俳人？が

ここに居る。

（和子）

新年 おめでとうございます。今年もどうぞよろしく。令和元年が、五月から八ヶ月と短かったので、いきなり二年という感じがする。

昨年暮れ、娘が使っていた部屋に、寒さを凌ぐため鉢物を十鉢ほど入れた。そろそろ終りという時、何？花が咲いていたわけでもないのに花びら？拾ってみたら、何と小さな折鶴であった。天井から下がっていた千羽鶴だ。スチールの棚の陰で何年経ったのだろうか。触ったら糸が切れてぼろぼろ、ぼろぼろ、何ととっても千羽である。これは大変と一羽残らず拾った。簡単には捨てられない。捨てたら罰があたりそうだ。透明な袋に入れて、リボンをかけた。もう忘れてしまっているであろう娘にも見せては。心を込めて折って下さった娘の友人たちに改めて感謝。そして、千羽の鶴たちにもご苦労さま……。

句材にもなる折鶴、筆者も何句かでお世話になった。（和葉）

水明

令和二年一月号

通巻一〇七二号

令和二年一月一日発行

発行人 山 本 鬼 之 介

〒330-0073 さいたま市浦和区元町一七二-八
電話 048-886-1600三

発行所 水 明 俳 句 会

〒330-0064 さいたま市浦和区摩訶四一〇二二
電話 048-822-1474一

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費（誌代を含む）

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費（誌代を含む）

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇〇〇一五三三九三

印刷所 中 央 美 版

季音抄

山本 鬼之介

払ふ手に粘る一期の雪ぼたる
合掌のほどく掌すぐに秋の冷
大根抜く来てはくれないラガーマン
ロボットの膝の屈伸文化の日
木の実ころころ着地の場所を探しをる
空海の綿虫包む諸手かな
皇后の感涙掬ふ秋の天
綿虫のかがよふ城址登りきる
納屋の戸を閉め短日の作業帽
片時雨山の端にある夕茜
一瞬に水のつながる秋出水
夕暮れて秋の簾に人の影
急坂にバスつんのめる紅葉狩
巫女の掃く箒目確か神の留守
龍神の燃やし給ふるダム紅葉
後ろ手の男刈田に立ち尽くす
銀座 晩秋昔の味の館蜜屋
張扇はつしはつしと秋闌くる

由良ゆら女
吉住 光弥
網野 月を
石井 喜恵
石山かつ子
大橋 廼代
小倉 倭子
十倉 和子
井上 燈女
丸山マスマ
森田 祥絵
高島 寛治
森川 義子
山田美佐尾
原田 想子
松宮 保人
梅澤 佐江
井上 玲子

次の原稿を募ります。随時発行
所宛、ふるってお寄せください。
なお掲載については、編集部にお
任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽
に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月
を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起
きた面白い話題、めずらしい経験
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由
枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本 鬼之介

兄 嫁 の 秘 密 の 漏 路 茸 狩
 パ ラ グ ラ イ ダ ー 秋 夕 焼 に 接 近 す
 畔 道 を じ ん じ ん ば し よ り ゐ の こ づ ち
 ス ポ ー ク の 影 の 交 叉 の 爽 や か に
 秋 の 川 面 影 橋 の 暮 れ 残 る
 忘 れ た き こ と 多 き 浜 辺 の 秋 思 か な
 秋 高 し 義 足 の 軽 き ア ス リ ー ト
 稜 線 ま で 色 を 重 ね て 夕 紅 葉
 無 住 寺 の 不 審 伝 説 曼 殊 沙 華
 逢 瀬 の 地 む か し の ま ま に 残 る 虫
 ゆ き ず り の 一 寸 立 見 の 村 芝 居
 徐 に 空 鉢 し て 松 手 入
 虫 時 雨 今 宵 の 空 を 凌 駕 せ り
 橡 の 実 の 水 門 の 今 水 は 無 く
 秋 澄 む や 凜 と し て 正 倉 院
 紫 蘇 の 実 や 小 さ き 幸 せ 掌 の 中 に
 初 詣 馴 染 の 茶 屋 の 串 団 子
 中 途 半 端 に 開 け お く 窓 や 秋 の 風

大塚 茂子
 保坂 翔太
 染谷 正信
 曲淵 徹雄
 野田 静香
 田中 章嘉
 正木 萬蝶
 横山 君夫
 近藤 徹平
 青木 鶴城
 加藤 どん治
 原田 秀子
 越田 栄子
 河野 はるみ
 渋谷 きいち
 飛永 鼓
 日高 徹
 宮崎 チアキ

句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第3木曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	太田絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	新宿区大久保 ルノアル	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤江 河野はるみ
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋 勉 代	森本早苗
婦人句会	第3月曜・午後1時	水明発行所	山中 順子	西山貴美子
若松句会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	菊池ひろこ 石田慶子

水明例会案内

水 明

令和二年一月一日発行 毎月一日発行

(第九十三巻 第一号) 定価

一〇〇〇円